

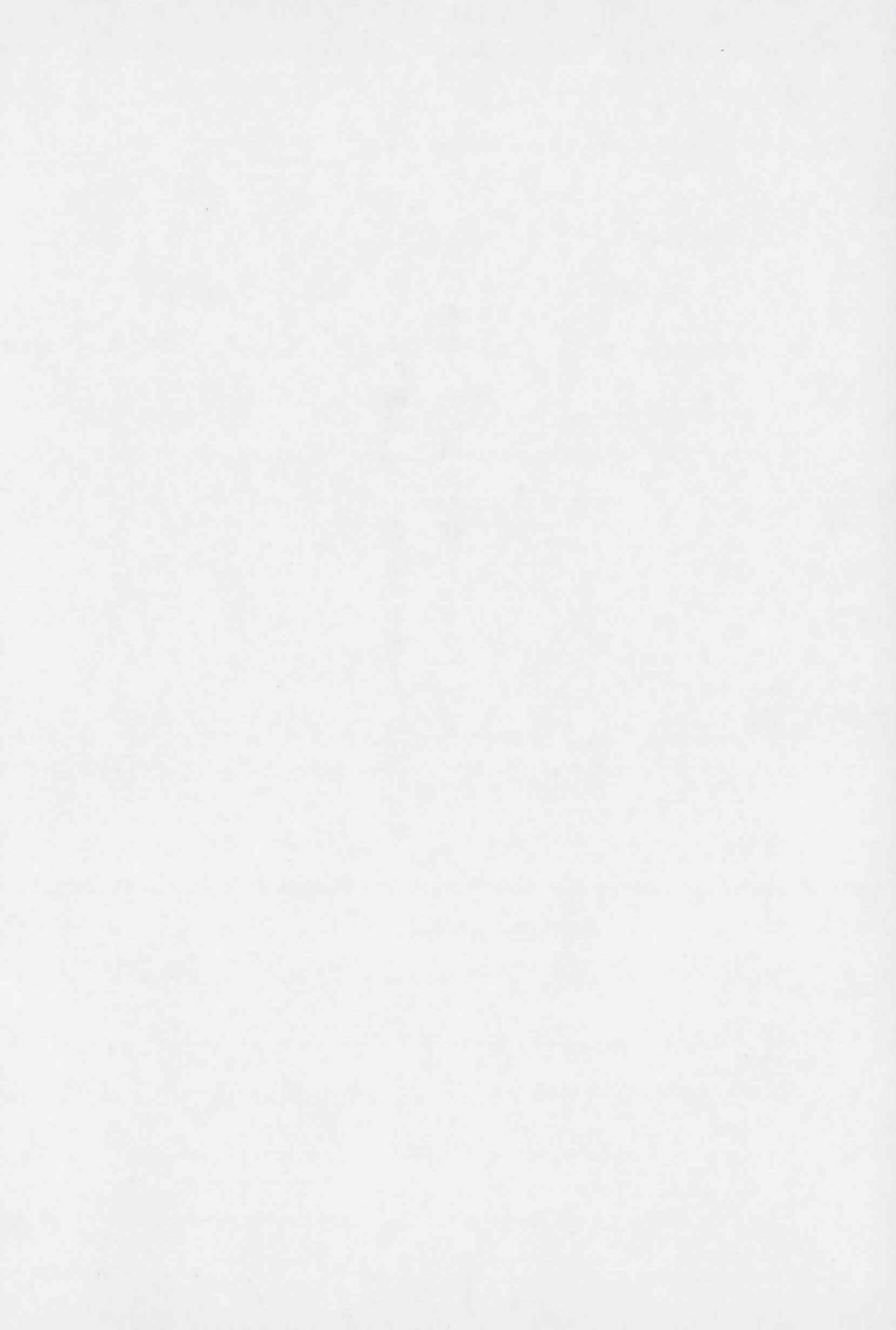
產政塾

V



產政塾

この編は、三十歳前後の前途有為な若者が
溢れる心の叫びを綴ったものである



目次

・産政塾Ⅴの発刊によせて	・	中部産政研	梅村志郎	1
・三十代にすべきこと	・	丸栄労組	斉藤正彦	5
・今思うこと	・	トヨタ車体㈱	橋本亨	11
・変化の中で	・	松坂屋労組	田島健一	19
・いま思うこと	・	名古屋鉄道㈱	稲川敦之	25
・KEEP FLYING	・	日本電装㈱	荒谷育三	31
・「吾れ、三十にして〇△×」	・	豊田合成㈱	高井信弘	39

• いかに生きるのか	45
------------	----

アイシン精機株 長尾基晴

• 効率化と人間	53
----------	----

日本電装労組 洲崎典之

• 「人間って変わるもんだ」	59
----------------	----

アイシン労組 渡辺 潔

• 最近思うこと	67
----------	----

全トヨタ労連 上田 信也

• 会社生活十年間を振り返って	75
-----------------	----

トヨタ車体労組 杉浦 一成

• 「二十一世紀の日本社会」	81
----------------	----

中部電力労組 内田 厚

• 十戒（私の人生観）	87
-------------	----

中部電力株 加藤 泰孝

• “Winterreise”	93
-----------------	----

トヨタ自動車株 荻野 勝彦

• 人との出会い	103
----------	-----

トヨタ自動車労組 加藤 昭夫

・サラリーマンの生きがい探し	日本特殊陶業株式会社	磯部謙二	109
・素晴らしい人生			117
・君が生まれた時	株式会社東海銀行	二木芳樹	123
・『旅に出て回想し明日を考える』	中部産政研	佐宗正典	133
・当り前であることの大切さ	中部産政研	十亀義則	141
・産政塾活動記録	中部産政研	願興寺 皓之	145
・あとがき			152

産政塾Vの発刊によせて

(財)

中部産政研 理事長

梅村 志郎



梅村 志郎（うめむら しろう）

昭和2年	愛知県小牧市生まれ
昭和16年	トヨタ自動車工業㈱ 入社
昭和41年	全国自動車産業労働組合連合会 中央執行委員を始まりに
昭和46年	トヨタ自動車工業労働組合 執行委員長
昭和57年	全トヨタ労働組合連合会 中央執行委員長，全日本自動車産業労働組合総連合会 会長代行などを歴任
昭和61年	全トヨタ産業政策研究会 理事長を経る
昭和63年～	財団法人 中部産業・労働政策研究会 理事長専任
現 職	全トヨタ労働組合連合会顧問，中部生産性本部顧問

〈趣味〉……健康とボケ防止のゴルフとマージャン

〈好きな言葉〉……誠

〔財〕中部産政研が主催する若手セミナー「産政塾」は、塾生の熱心な参加と多くの関係者の理解と協力を得てこの度第五期を終えることができた。

産政塾は、約半年間のスケジュールで異業種の若者十数名が企業や仕事の枠を越えて参加するセミナーである。内容は、あらかじめテーマを決めて講師の指導を受けるという通常おこなわれているスタイルではない。参加したメンバー自らがテーマや講師を選び、講師のところに外向いて教えを請うという形で運営している。

産政塾は異業種の人達の集りである。企業や仕事の枠をこえてお互いが夢を語り、天下国家を論じ、多様性を取り入れて大いに論争をする。そうした論争の中から新しいエネルギーを生みだそうとするものである。こうした活動を通して、自らの考えを検証し、自らの役割・生き方を自覚する。いうならば自らを磨く道場といったものである。

人間形成の基本的時期は青春期であるといわれているが、社会人として、家庭人としてまた仕事上の人間としての基本が形成されるのは、三十才前後からの十年ぐらいであろう。

この年代は、家庭をもち子供も生まれ、親戚や隣り近所の新しい付き合いも始まる。一応仕事にも慣れ自分で判断できる能力もつきつつある。自分の成長を中心に考えてきた青春期とは違って、周囲とのかかわりの中で自らの成長を考える年代である。

そしてこの年代は、精神的にも肉体的にも充実しており、仕事面でも家庭面でも先頭に立って行動する。そんな年代である。産政塾に参加するメンバーはこの年代の人達である。

今回も、意欲においても能力においても次代をリードする人材であることは間違いない人達の集り

となった。そして、この若者達十五名が半年間に亘ってお互いの夢を語り、自らの企画によってその実践に情熱を注いだ。

参加者一人一人が、新しい時代に対応するパラダイム、あるいは自らの生き方についても「何か」を得ることができたものと信じている。

この冊子は、第五期生がセミナーを通して得た体験をふまえて、自らの思いを「若者のロマンと叫び」として綴ったものである。ぜひご一読を願いたい。

産政塾は極めて小規模の催しであり、参加するのは限られた人達である。したがってこうした冊子を通して一人でも多くの人達の共感を呼ぶことができればと思っている。

塾生と同世代の人達の共感を呼び、自己向上の糧となることはもとより、指導的立場にある人にとっても参考にしていただけることが多いと思っている。

なお、産政塾に対して格別の理解と協力を賜りました講師をはじめ関係者の皆さん方に感謝を申し上げますと共に、ご一読を頂き産政塾および塾生に対してご指導・ご声援を賜わることができれば誠に幸いである。

平成六年十一月

産政塾 塾長 梅村 志郎

30代にすべきこと



丸栄労働組合

斉藤 正彦

〔プロフィール〕

斉藤 正彦 (35歳)

- 1959年 愛知県名古屋市生まれ
- 1982年 株式会社 丸栄 入社
婦人服を担当
- 1994年 丸栄労働組合専従
〈家族〉 妻・長女 (9ヵ月)
- 〈趣味〉 散歩
- 〈モットー〉 人間万事 塞翁が馬

一 一 一 年

産政塾に派遣されてから早いもので約十カ月が経ち、「卒業論文」の時期を迎えることとなりました。塾生のメンバーが最も恐れていた時期が来たことになります。

さて今年もあつと言う間に終盤を迎えました。この一年の話題と言えば自社連立政権の誕生、円高の進行で一ドル百円を割る時代の到来、昨年の長雨やコメ不足に続いて猛暑という天候不順による水不足、スポーツの世界では、オリックスのイチローの二百安打達成など、いづれをとってもちよつと前には考えられなかったことがいろいろと起こりました。これらのひとつひとつの現象に、それぞれの利害をあてはめ、思ひは人それぞれといったところでありましょう。

しかし人間の力の及ぶ範囲でないという点において最も深刻というべきは、天候の問題だったかもしれせん。

それまで意識することもなく通り過ぎて来た「水利権」なども一躍流行語となり、複雑な権利の実態が新聞等で紹介され、多くの人が随分と水に関して詳しくなったものです。

実は私の場合、常に最悪の事態に備える習性があり、今回の水不足に対してもいち早くミネラルウォーターを約三十リットル分買い置きをしました。しかしその後、名古屋市は「自流水」を取水していると聞き、水不足も一段落した今となっては、せっせとこの買い置きを減らすことに専念しています。しかしいずれにしてもこの水不足は、よい経験になりましたし、水の大切さ、ありがたさを忘れる事なく今後の教訓にしてゆく必要があらうと感じます。と同時に地域によっては長時間断水する

など、大きな差があったことも今後についてはさまざまな議論を呼ぶことになるでしょう。

二 問題意識

このようなことはよくあることで、例えば飛行機事故が起こればその原因追及を通じて各種の報道がなされ、飛行機の「専門家」が増えます。そういう機会を通じて一般の人がさまざまな専門知識を得て、「百家争鳴」で議論をし、それまで問題にならなかったことでも見直すべきところが浮き彫りになってくることは非常に大切なことではないでしょうか。報道を通じて世論が形成され、それがさまざまな改善につながればそれにこしたことはありません。

このことは私たちの普段の仕事にも共通することです。だれもが長年勤めていると、社内のシステムやルールのようなものに全く疑問を感じなくなってゆくことがあります。過去からずっとそのようになっているから、それでよいという発想に陥りがちです。しかし若い世代の目にはそれが前近代的で不合理なことのよう映っているかもしれません。また社内ではそれが普通でも、他企業・他産業、あるいは諸外国からみればまったく理解できないこともあるだろうと思います。

そしてそのように普段何の問題意識も持たずに通り過ぎて来たことが、何かのきっかけで課題がクローズアップされてくることがあります。本来的にはきっかけなどなくても常に問題意識を持ち続けることが大事ですが、なかなかそのような組織や人間は少ないのが現実です。

それはともかく私たちは、あるひとつのことを通して浮き彫りになった問題点を、その場限りの場当り的な発想で処理してしまうのではなく、どこにその問題の原因があって、何を抜本的に見直す必

要があるのか、そして短期的な捉え方をするのではなく、中長期的にみてどう判断してゆくべきなのかを常に考える必要があります。同じ問題意識を持ったとしても、それをそのままにしておくか、また対応を考えるにしても、どこまで掘り下げて考えるかによって結果は随分違ってきます。日常の仕事のなかでもそういった意識を持って取り組むことが大切です。

三 変革に向けて

最近の流行語に「変革」という言葉があります。政治・経済・社会のあらゆる分野において転換期の真っ只中であり、新しい時代に向けた真の「変革」が求められていると言われています。それは何も政治や経済といういわゆるマクロの部分だけでなく、私たちの生活・職場単位・企業単位・あるいは労働組合にも同様ではないかと考えます。

私自身会社に努めて十二年以上が経過し、最初の数年はあらゆることに疑問を感じ、それをなんとか是正したいと思って、そのために人とぶつかっていたような気がします。それがいつの間にか毎日ぶつかっていた疑問が、一週間に一度程度となり、そのうちほとんど疑問を感じなくなってきたように思います。人は年とともにある程度性格に丸みを帯びて来るもので、そのこと自体は必ずしも悪いことではないにしても、やはり問題意識を持たなくなっては人として何の魅力もありません。その意味で今、私は三十歳台中盤にさしかかり、今一度情熱を持って与えられた職務に、あるいは生活に真剣に取り組んで行きたいと考えています。

そのためには、自分の身の回りのあらゆる事柄をもう一度見直すことから始めなければなりません。

過去の全てを否定するとはいいられないにしても、長い間にいろいろな意味で疲労してきている制度や習慣に対し、原点に立ち返って根本精神を見つめ直し、自らに問いかけながら、あるべき姿や理念を描いて行くことが大切であろうと考えます。そして大切なことはそれを実行に移すことですから、たとえ自分の思いの中の何分の一しか実現しなくても、恐れる事なくどんな欲に進んで行けたらと思います。そうすることで自分自身の「変革」を進めてゆこうと考えています。

そして多くの人が、常にそのような発想に立って、個人の単位から職場の単位、そして企業や組合の単位でも本当の意味での「変革」が実現できるよう取り組んでいかなければなりません。

最後 に

産政塾は異業種の中堅社員・組合役員で構成されています。この一年を通していろいろな交流をし、情報交換をしました。商業に勤務する私には、メーカーのことは全く知識がなく、随分勉強させていただきました。ただいたと思います。

また私は今、労働組合の役員をしており、組合専従の立場で仕事をしています。労働組合の活動は、賃金・労働条件をはじめとする福祉条件の向上はもとより、対内的には組織の活性化、人材の育成、経営対策活動など直面する課題が山積しており、また対外的にも、地域・社会への貢献活動、制度・政策への取り組みなどの社会的役割を担っています。

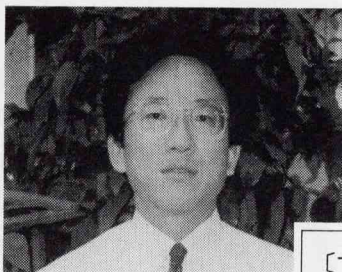
よき企業人、社会人そしてよき生活人であるために、今まで以上に積極的に活動領域を広げてゆく必要があると感じています。その意味で、産政塾で得た経験と人とのつながりは大きな財産として今

後に生かしていきたいと思っています。

今 思 う こ と

トヨタ車体㈱ 人事部

橋 本 亨



〔プロフィール〕

橋本 亨（39歳）

- 1955年 名古屋生まれ
- 1981年 トヨタ車体㈱入社
人事部人事課配属
- 1986年 経営企画室へ
海外事業を担当
- 1993年 人事部教育課へ
現在に至る

〈家族〉 妻・長男

〈趣味〉 生き物との付き合い

（植物、魚類、昆虫等、多数）

もう卒業論文を書く時期がやって来た。さて、何を書くかと考えたとき、「内容は自由」というのは書き出すまでに実に時間がかかった。日頃の問題意識が稀薄だからであらう。とはいうものの、目を閉じて心を無にし、この一年を振り返り、頭に浮かんできたキーワードを基に、今思うことを書いてみたい。

微に入り細にわたって行なわねばならない

「人間はまず自分の好きなことをすることが大切である。」と、私は思っている。何故なら、好きと感ずることをやっているうちに、新しい世界が広がってくると信じるからである。その半面、好きなことをするのは近所迷惑なことも多い。そこで、近所迷惑をあまりにも恐れることになる、結局のところ、何もできなくなる。つまりは、近所迷惑のことも自覚しつつ、それでいて好きなことをやっていくところに、人生の面白味のひとつがあるのではないだろうか……。

好きなこととして、「善行（ボランティア）」をしたい人たちが最近増えたように感じる。この人たちの一番困ることは、何しろ善いことをしていると思っただけで、近所迷惑についての自覚が全く薄いことである。例えば老人ホームにやってくるボランティアの人が居る。やってくると、老人にやたらに親切にする。老人の方もやはり誰かに甘えてみたいものだから、つい何やかや要求することとなる。それに応じていると、老人も嬉しくなると、日常は出来ないことまでする。これは確かに素晴らしいことである。しかも、この人は無償でやっているのだから、ますますそれは「善行」と言うべ

きである。

しかし、こんな人が時たま来てくれると、施設の人たちが後で苦勞することとなるそうである。甘えることの味を覚えた老人は、次の日になると、今まで自分でしていたことまでしなくなつて、他人に頼ろうとする。施設にいる人たちは、それにいちいち応じて居られないし、やはり、老人と言つても出来得る限りは自立的に生きて欲しいものである。

時には、この老人が、ボランティアの誰さんは優しい人だけど、ここの施設の人は冷たい人ばかりだなどと言ひ出すかも知れない。こうなると施設の人には面白くない。そこで、ボランティアの人が次に来たときは、あまり歓迎しない。そこで、「あれっ」と気がついて、施設の人と話し合うようなボランティアは、本当に素晴らしい人だ。しかし、一般に「善人」は他人の氣持ちにノーマークの人が多いので、そのまま平氣でやってくるのではないか。と言っても、ものごとには限度があつて、施設側から急に來所を拒まれたり、板ばさみになってきた老人が急に無愛想になってきたり、とかの破局を迎える。

こんなときに、せっかくボランティアでやっているのに何だあの施設は、というので、次の所へボランティアに行く、というような渡り鳥的善行を繰り返している人もいるそうである。

しかし、本当に善を行ないたいのだったら、「微に入り細にわたって行なわねばならない」のではないからうか。施設の人の不機嫌を感じとったら、それについて考へてみる必要がある。老人が、あれをして欲しいこれをして欲しいと言つたとき、それにすぐ応じることが、本当に意味のあることか、と

考えてみる必要がある。それらのことをひとつひとつ取りあげ、考えてゆかないと、善が善にならないどころか、有害なことにさえなってくる。そこで、「善は微に入り細にわたって……」のような言葉が大切となるのではないか。

話は変わって、いわゆる先進国のODAの実態などを見ると、この言葉の重要性を痛感させられる。たくさんのお金を使って、いろいろな物を送りこむのだが、それによって、その国は果たして「豊か」になるのだろうか。本来はその国に無かった物を急激にかつ大量に送りこむことによって、その国の持っている基本的な文化を壊すようなことになってはいないだろうか。それは武器による侵略と似ているとさえ言えそうに思う。

微に入り細にわたるような面倒なことはしたくない。ともかく善意でやっているのだから、と言う人は、それは自分が好きでやっているだけのこと、賞賛に値しないどころか、極めて近所迷惑なことをしているのだ。という自覚ぐらひは持って欲しいと思う。ボランティア活動というのは、余程気をつけてやらないと、逆効果を生む可能性をもったものではなからうか……。

同じ『運命』でも値段が違う

日本人は、ベートーヴェンの交響曲第五番「運命」が大好きである。クラシックなど関心がないという人でも、あの「ダ・ダ・ダ・ダーン」を聴くと「運命だな」と思ったりするぐらいである。と

ところで、この交響曲を、ベルリン・フィルハーモニーが演奏するのと、日本のオーケストラが演奏するのとを比べると、随分と値段が違うのは当然である。二万円の券がたちまち売り切れになるかと思うと、三千円の券を押しつけるのに相当苦勞することになる。といって、それは「運命」に変わりのない。

いったい何を言いたいのかというと、たとえ、人間にとって運命が決まっていたとしても、その運命の生き方によって、まったくその人生は異なるのではないか、ということである。

運命があるかないか、などと議論してもはじまらない。そんなことはわかるはずがないことである。要はどちらの考え方をとるかということで、私は、運命はある、と考えるのが好きな方であるが、我々の人生は、「楽譜（運命）」を与えられるにしろ、演奏の自由は各人に任されており、演奏次第でその価値はまったく違ったものになる。と思つてゐる。

こんな外国話を読んだことがある。ある一卵性双生児の一人は大司教になり、もう一人は大盗賊になった話であった。調べてみると、二人ともほとんど時を同じくして若い時に家出をしているが、一人は腹がへって窃盗にはいったところを、偶然に盗賊に見つけられて、その集団には入り、次第に頭角を現わして大盗賊になった。これに対して、もう一人も盗みにはいったが、そこは教会で、神父にさとされて改心し、遂には大司教になったという。「運命」といっても、大司教になる運命とか、大盗賊になる運命などというものはない。運命はベートーヴェンの「ダ・ダ・ダ・ダーン」のように、いわく言い難いものだ。その「動機」のようなものを、どのように歌いあげてゆくかは、一人ひとりの

人間に任されている。大司教と大盜賊にしても、その後、司教は地位に甘えて贅沢三昧に暮らし、一方、盜賊は前非を悔いて、後は貧しいながら聖者のような暮らしをするかも知れない。似たような「運命」でも、その価値は全く異なってくるのである。

ドイツの大指揮者フルトベングラーの指揮する、「運命」は、名演奏の誉れ高いものであった。

ところで、このフルトベングラー氏が来日し、日本のオーケストラを指揮したが、楽員はまったく困ってしまったそうである。なにしろ、フルトベングラー氏は、「運命」のはじまるとき、両手をやらにぐりぐりと動かして、五分間ほどしてからやっと、「はじまり」の合図をしたそうである。何しろ、指揮者といっても哲学者顔負けの人で、「道端の一本の雑草にも意味を見出だす」などと言われた人だから、「運命」の解釈も深淵なので、楽員は、はじめの合図がわかりにくいのである。そのため、舞台練習のときになっても、最初の「ダ・ダ・ダ・ダーン」が合わなかったそうである。

マネージャーがドイツに電話をいれ、あちらの楽員にどうするかをきくと、「何も深く考えず、フルトベングラーの両手が頭の上で交差する瞬間があるので、そこから、『一・二・三』と数えて『ダ・ダ・ダ・ダーン』とやればよい」とのこと、マネージャーは大喜びで日本の楽員に伝えたのはよかったが、彼は興奮していたので、『一・二・三』のところを、『一・二・ノ三』と伝えてしまった。

さて、演奏会するとき、『一・二・ノ三』でやったので、楽員たちのはじまりはきれいに合ったが、フルトベングラーの指揮とは半拍ずれてしまった。マネージャーは失敗に気づき、どんなことになるかと気が気ではなかった。演奏が終わると、フルトベングラー氏が気難しい顔で引きあげてきたので、

どんなに叱られるかと覚悟していると、大指揮者は暫く沈黙していたが、「この国では、『運命』が半拍子遅れて扉をたたくのは、どうしてなのだろうか……」と言って、深く考えこんでしまったそうである。

夏バテのせいもあって、後半は真偽不明の文章を書いてしまったが、要は、仮に運命があったとしても、その受けとめ方によって、まったく異なるものになる、ということ強調したかったのである。そして、その受けとめ方に失敗したとしても、真剣にやれば、それはそれなりにまた面白い結果をも引出してくるのではないだろうか。「運命」を嘆いてみたり、何とか変えられないかと無謀なことをしたりするよりは、いかにそれを歌いあげるかを考える方が得策ではないだろうか。

この一年を振り返ったとき、言うまでもなく産政塾のことが頭に浮かびました。各会合で会った講師の方々、お世話になった事務局の方々、そして、勿論同期生の顔……。

会社を離れて様々なものに触れ、物事を考える機会を与えて頂いたことに感謝しています。又、これを終りとせず、産政塾で出会った方々とのつながりを大切にしながら、私の運命を歌いあげていきたいと思っています。

変化の中で……

松坂屋労働組合

田 島 健 一



〔プロフィール〕

田島 健一（30歳）

- 1964年 愛知県生まれ
- 1989年 株式会社松坂屋入社
名古屋駅店和洋酒・缶詰売場に配属、その後靴売場に異動
- 1992年 松坂屋労働組合名古屋駅支部書記
長次長（専従）
現在に至る

〈家族〉 独身

〈趣味〉 スポーツ

〈好きな言葉〉 今を生きる

家に帰って来て、テレビをつけた。サッカーの日本代表チームが、オーストラリア代表チームとアジア大会の壮行試合を行っている。国立競技場は観客で一杯である。日本のチャンスのたびに大歓声が沸き上る。試合を見ながら、サッカーは日本の文化の一つになったことを実感した。

振り返れば、物心ついたときからボールと戯れていた気がする。二つ違いの弟とキャッチボールをしたり、ボールを蹴ったり。家のガラスを割ったりして、よく親に怒られていた記憶がある。

小学校時代は、春・夏は野球、秋・冬はサッカーをやっていた。私の住んでいる尾張旭市では、毎年秋にサッカーの大会があり、市内六つの小学校で優勝を争っていた。二期が始まると同時に練習が始まった。毎日、朝一時間と放課後から日が暮れるまで練習をし、大会が始まるまでは、日曜日はすべて練習試合に行っていた。小学校時代が最も純粋に、そして最も一生懸命にサッカーに打ち込んでいたと思う。

六年生になり、センターフォワード（トップ）のポジションを獲得できた。大会では、私の学校は順調に勝ち進み、決勝戦まで進んだ。決勝戦の開始早々、私のチームのディフェンスがペナルティーエリア内でハンドを取られ、ペナルティーキックにより一点先取された。一点を追いかける私たちは、徹底的にゴールを攻め続けた。前半終了間際、相手のディフェンスラインを越えるパスが私の前にきた。ゴールキーパーと私の一対一である。私はドリブルをしながらボールコントロールをし、ゴールキーパーが飛び出した瞬間にシュートした。私の蹴ったボールは、ゴールポストのわずかに上を越えていった。あの瞬間は、今でも鮮明に覚えている。結局、そのまま点を取ることが出来ず、私の学校は

準優勝で大会を終えた。そのときの悔しさを、私は卒業文集に書き殴って、小学校を卒業した。

中学校に進学すると、私は迷わずサッカー部に入学した。当時は、王・長島の時代であり、スポーツの好きな中学生のほとんどが野球部に入学した。母は、親戚に私の話をするとき、「日本では野球のほうが人気があるけど、世界ではサッカーのほうがずっと人気は上なのよ」と、いちいち言い訳していたことを覚えていて。私の入学したサッカー部は、一人のスーパースターがいたため、とにかく強かった。中学校時代の三年間で、負けたことはほとんどなかった。（そのスーパースターは、特別待遇で愛知高校に進学し、一年からレギュラーポジションを獲得し、二年からキャプテンを努めていたが、三年生のとき腰を痛めてサッカー人生にピリオドを打った。）

高校入試を終え、のんびりと高校野球選抜大会を見ていたら、なぜか感化されてしまい、高校入学と同時に野球部に入学していた。高校野球は高校野球で、それなりに面白かったのだが、サッカーからしばらく離れると、以前にもましてサッカーへの想いが強くなり、大学では入学と同時にサッカー部にまた戻った。しかし、入学した大学が生徒数四〇〇人弱の学校で、サッカー部の新入部員もたった四人であり、三部リーグの弱小チームであった。いくら練習をしても結果の出ないチームなので、だんだんと気が入らなくなり、しばらくすると練習もサボるようになってきた。

これといった思い出のない大学時代のサッカーではあったが、Ｊリーグの試合を観戦するたびに当時の日本リーグを思い出す。瑞穂競技場で行う日本リーグの試合には、愛知県内の体育会系サッカー部の部員が、ボールボーイ（フィールドから出たボールを拾ったり、観客が競技場に入ってこないように監視する）としてかりだされた。今ではＪリーグの試合のときには、超満員になりチケットも手

に入らない状況なのだが、当時は二十人から三千人ぐらいいしか観客はいなかった。もちろん、顔にペインティングする人や、フラッグを持って応援する人もいない。ゴールが決まってもばらばらと拍手があるぐらいであった。

ピッピッピッ。試合終了のホイッスルが国立競技場に鳴り響いた。結局オーストラリア代表とのアジア大会壮行試合は○対○のまま終わった。九十分間戦った日本代表への暖かい拍手と、一点も入れることのできなかった日本代表へのブーイングが国立競技場に響き渡った。どちらにしろ、これだけの観客の前でプレーができる今のＪリーガーは幸せである。

十年前、私が瑞穂競技場でボールボーイをしていた時、だれが今のＪリーグを予想できただろう。日本リーグのチケットを手分けして売っていた時、十年後Ｊリーグのチケットを手にいれるための事件が起きるとだれが予想しただろう。だれも予想できないことが現実起こっているのである。

この十年間には、サッカーだけでなくいろいろなことがあった。バブルでだれもがこの世の春を謳歌していたら、突然バブルが弾け、終身雇用・年功序列といった日本の経営が根底から崩れていった。ベルリンの壁が崩壊し、ロシアは分裂し、世界中で民族紛争が起こっている。ついに円は一ドル一〇〇円を突破し、生活レベルはたいしたことなくても世界一の金持ちになってしまった。自民党が野党になったと思ったら、なぜか社会党と手を組んで社会党の委員長が総理大臣になってしまおうし……だれもが予想できない、信じられないことが次から次へと起こっている。今までの価値観が根底から覆され、新たなベクトルへと向かっていく。何が正しくて、何が間違っているのか。何を基準に判

断して、どう行動していけばよいのか。何が何だか、もう分からない。きっと、その時一番強いベクトルに従えばいいのだろう。他が強くなったら、そちらに乗り移ればいいのだろう。ひとに何と言われようが、それが自分を守る世渡りというもののなのだろう。しかし、そこに自分は存在するのか。例えば最後までうまく泳ぎ切っても、そこには何が残るのだろうか。気が付いたら、疲れ切った自分が空しく目標も希望もなくなたらずんでいたら……

先日、私もついに三十才になった。この十年間を振り返ると、ただただ、時間に流されていたような気がする。十年後、二十年後の社会はどうなっているのか私には予想は出来ない。しかし、十年後、二十年後に自分はどうかという目標は立てることができる。まず目標を立て、その目標を達成するために、今何をするべきなのかを考え、自分を取り巻く環境の中で最大限の努力をしたい。どんなことが起きても自分を見失わないように……

いま思うこと



名古屋鉄道㈱ 人事部

稲川 敦之

〔プロフィール〕

稲川 敦之 (27歳)

- 1966年 岐阜県岐阜市生まれ
- 1990年 名古屋鉄道㈱ 入社
駅務・車掌など鉄道現場で研修
- 1993年 人事部労政担当
現在に至る

〈家族〉 妻

〈趣味〉 カヌー、スキー

時がたつのは早いもので、昨年十二月の入塾以来八カ月が過ぎ卒塾のときを迎えた。「異業種の仲間が集まり様々な世界の第一人者を講師に招き論議を交わす」ことを目的とした「産政塾」に参加させていたでいて、入社して間もない自分にとってたいへん貴重な体験をすることができた。今期も卒塾にあたり本を出版する機会を与えていただけたので、いま、自分が考えていること、思っていることについて思いつくまま書きたいと思う。

一 豊かさを考える

バブル経済最盛期には、一般に「日本は世界で最も豊かな国」といわれるのと同時に「真の豊かさとは何か」が大いに議論された。我々日本人は、戦後の荒廃期を乗り越え、欧米諸国に追いつけ追い越せとばかりにひたすら働き続けたことにより、今日の物質的繁栄を勝ち取ってきた。その結果、日本人の意識は「九割中流」といわれるほど皆が自分の生活にある程度満足できるようになった。この日本人の「中流意識」がさらに「人よりちょっと上」「ちょっと多い」「ちょっと優れている」ことを要求することにより、日本社会の物質的氾濫を招いていると考えられる。家庭は電化製品で溢れ、車は免許所得者の数だけ所有するようになり、大学への進学率も四割を超えるまでになった。

しかし、本当に我々の生活は豊かになったのだろうか。本来、私たちが生活するために必要なだけの物・金さえあればよいのであり、人生の本来の目的は「物質的、金銭的に豊かになること」ではないはずである。家族とともに分かち合う健康でやすらぎのある生活、やりがいのある仕事、趣味、友情、自然との共生、などが充たされればよいのである。必要以上に金儲けにはしつてみたり、損得だ

けで取捨選択することは豊かさとは無関係であると思う。

■年次有給休暇を取得しにくい理由

1	周囲に迷惑がかかる	32.4%
2	病気など有事への備え	27.8%
3	仕事がたまり後で忙しくなる	27.0%
4	仕事が多く人手不足	23.7%
5	休暇をとりにくい職場の雰囲気	15.0%
6	休暇取得に罪悪感がある	13.6%
7	休暇中仕事の進行状況が不安	12.0%
8	週休2日制充実で平日は休みにくい	8.3%
9	配置、昇進、賞与への影響が不安	6.6%
10	休んでもすることがない	5.9%

資料：労働省「労働時間短縮に関する意識調査」（89年）より

■人生目標の明確度（大学生／世界11都市比較）

人生に明確な目標や 目的を持っている			人生に何の目標も 目的も持っていない		
1	アブダビ	97.6%	1	東京	31.2%
2	ナイロビ	95.0%	2	モスクワ	14.4%
3	サンパウロ	83.0%	3	ソウル	11.0%
4	ボンベイ	82.5%	4	サンパウロ	10.7%
5	ボストン	82.4%	5	ロンドン	8.7%

資料：立正大学「世界11都市の大学生の生活価値観の調査」（92年）より

注：対象は世界11都市（東京、ソウル、北京、ボンベイ、アブダビ、ナイロビ、ロンドン、ワルシャワ、モスクワ、ボストン、サンパウロ）の大学生2,498人

我々日本人は豊かさへの道を間違えたのではないだろうか、二時間以上も通勤に時間をとられてしまうサラリーマン、偏差値主導の受験競争に追い立てられる子どもたち、そしてそれらのラインになじまず落ちこぼれてしまう人々。私たちは経済的に豊かになることを至上目的としてきたため、人は利己的になり、我々に心のゆとりを与えてくれるはずの「福祉」や「自然の保護」などには目が向け

られなかった。そしてその結果「まわりに気を配るあまりに休みが取れないサラリーマン」や「苦勞して大学に入ったとたんに目的を失ってしまう学生」が増えている。

經濟至上主義による日本の「物質的豊かさ」は、様々な弊害をもたらしている。我々は、「国がいないのだ」とか「社会が間違っている」などという前に、「真の豊かさ」Ⅱ（人と人、人と自然の豊かなつながり）を実現するために「何が必要なのか、何をしなくてはならないのか」を真剣に考え、どんな些細なことでもいいから実行に移してゆく努力をしなくてはならないと思う。

二 日本人のモラルについて

私は長良川のすぐ近くに住んでいることもあり、最近の流行に便乗してカヌーによる川下りをしている。つい先日とも友人達と長良川の下流域を下る機会があったが、そこで見たものはテレビなどで放映されている「清流長良川」からは程遠い風景であった。水面には大量のゴミと油のようなものが浮き、河川敷には一部の心ないオート・キャンパーや釣り人の残したゴミが散乱していた。人はきれいな景色や自然を求めて景勝地や野外のフィールドを訪れるはずなのに、知ってか知らずかその自然を自らの手で破壊して帰るのである。

二千年以上前の中国で言われた言葉に「衣食足りて礼節を知る」というものがあるが、今日の日本では「衣食足りて礼節を忘れる」の方がふさわしいのではないかと思えることがしばしばある。街中いたる所で見かけるゴミやタバコの投げ捨て、周りの人への迷惑を考えない傍若無人なふるまいなど例を挙げだしたらきりが無い。社会生活を営む上での必要最小限のルールすら守れない人が増える中、

「礼節」までわきまえた行動を要求するのはさらに困難なのではないかと思ってしまう。この問題にも、どことなく物質的な繁栄の影響が現れているように思う。大量生産が可能になり同時に大量消費がなされ物が溢れる、多くの物が「使い捨て」になり大量のゴミが発生するようになる。一部を除いてほとんどの百貨店やスーパー・マーケットで買い物をすると過剰な包装がされゴミを増やすのに一役かっている。日常的に大量のゴミが発生するいま、ゴミを捨てることに關して我々日本人の大半は、無関心に無責任になっていると思う。自宅から一歩外へでると街中どこでもゴミ箱のようにポイポイとあちらこちらにゴミをすてる人がおり、子どもはその姿を見て当然のようにまねをする。そのような姿を見かけても注意をする者もほとんどいない。このようにして日本中すべてがゴミ箱と化している。最近では、一部の心ある人達の中でゴミゼロ運動・分別回収などがさかんに行われているが、まだまだ焼け石に水のように、もっと大勢の人が周りに「ちょっとした配慮」をすることを心掛けることが必要だと思う。

小・中、高校生と長きにわたって行われたはずの道徳教育は果たして役立っているのか、また家庭での道徳教育は行われているのだろうか。いま日本の道徳教育は根本的に見直すべきときに来ていると思う。

三 三十を前にして思う

突然話が変わるが、最終第七回の会合の時に「三十代にすべきこと」というテーマがとりあげられた、その折りに私は「二十代後半（残り僅かではあるが）には何をすべきなのか」と考えてみた。

二十代は好奇心が不安を吹き飛ばしてくれる年代であり、「勢い」を大切にしなければならぬと思う。不安に駆られるあまり行動がこじんまりとしてしまつては、来る三十代へのステップ段階として少々物足りないように思える。そのためにも失敗を恐れず何にでもチャレンジしてみる「行動力」が必要であり、失敗を次への原動力とすることが可能な「精神力」を養いたいと思う。

四 「産政塾」に参加して

今回「産政塾」に参加して様々な人にお会いすることができた。異業種から集まつた同世代の仲間との交流、様々な分野の第一線で活躍されている方々の講話、同世代で信念と志を持って理想の現実にした一杯取り組んでおられる「松下政経塾」塾生の方々との交流など、私にとってたいへん刺激になった。その中でも、第二回の会合で「松下政経塾」へ体験入塾したことがもともと印象に残っている。我々と同じ世代の塾生が「大志」を抱き、地域のためにひいては日本のために「自分は何をしなくてはならないのか」「自分に何ができるのか」を真剣に考え実行しようとしている姿に、自分を含めて今の日本の若者に一番欠けているものを見つけたような気がした。上甲塾頭の講話の中に「評論家になるな」という言葉があったが、まさしく我々の多くは「評論家」のように口は出すけれども実際に自分が「何か」を実行し、成し遂げることはしていないのが実状だろう。今回の「産政塾」で得たことは今後、仕事をしていく上でも、地域社会での生活の中にもぜひとも役立てていきたいと思う。

最後に、このような素晴らしい場を提供してくださった事務局の皆様感謝するとともにこの「産政塾」が今後もさらに発展されることを願いつつ筆をおきます。

KEEP FLYING

日本電装㈱ 人事部

荒谷 育三



〔プロフィール〕

荒谷 育三 (27歳)

- 1967年 名古屋市生まれ
 - 1989年 日本電装㈱入社
人事部人事にて配属・
ローテーション等を担当
 - 1992年 人事部企画へ異動
人員計画業務を担当 現在に至る
- 〈家族〉 我が身一つ
- 〈モットー〉 人生楽ありゃ苦もあるさ

一、黄金の国ジパングは何処へ？

先頃景気回復宣言なるものが出され、長かった（ような）平成大不況もようやく終焉を迎えようとしている。しかしながら今回のバブル↓不況への図式は、過去の景気循環の一環としてのそれとは異なり、日本が今、歴史の大きな転換点にあるという、非常に大きな意味合いを含んでいるように思えてならない。

戦後モレーツに働いてきたからこそ世界一の一人当たりGNPを達成して、まさしく大国となっているわけだが、裏返せば大国の国民は労働を一時間休めば、世界一の損失をしていくのである。世の常として、豊かになれば人々は勤勉さを失い、怠惰になるから必然的に大国は亡びていくことになる。ごく簡単には、彼のP・ケネディ氏の根本的なロジックはこれだと思う。今回の不況も、キャピタルゲイン等の不労所得で繁栄を維持し続けられる程に、歴史のダイナミズムは甘くないという一つの警笛だったような気がする。

時短が進み、これからは“ゆとりの時代”だとか“余暇の重要性”といったことが叫ばれているが（勿論私もこれについては異論はないが）、我々はよほど工夫と知的努力を怠らずにしてゆかねば、他に類を見ない程の速さで堕ちていく可能性もあるかもしれない。アジアの周辺国は、羨ましい程にギリギリとしてエネルギーだし、ヨーロッパには全ての意味で大きなストックがあるし、アメリカには計り知れない底力がある。また、我が国自体も高齢化の進展、産業の空洞化等避けては通れない幾つかの大きな問題に直面している。

最近、書店へ行くと二十一世紀の日本経済だとか二十一世紀の企業経営といった二十一世紀について論じている本をよく見かけるが、むしろ今から二十一世紀への数年間にいかに足元を見据え、長期的ビジョンを確立していくかが日本国全体にせよ、各企業にせよ最も重要な課題となってくるのではないだろうか。

「盛者必衰」という冷酷なる原理を貫いて営まれる歴史の流れに、我が黄金の国ジパングも飲み込まれていってしまうのか、それとも黄金の鳥として飛び続けることができるのか、ポイントはそのにあるような気がしてならない。

二、六千五百万の一人として思うこと

六千五百万人の労働力人口を構成する一人として、今後我々に何が求められるのか、また何が必要となってくるのか、思うところを述べてみたい。

「旺盛な好奇心」

最も重要なのは“旺盛な好奇心を持つ”ことではないだろうか。今後一層ボーダーレス化が進展し、また、終身雇用、年功序列といった日本的経営が次第に姿を消していくであろう中で、何々株式会社何々ですとしか自分を主張できないようでは、間違いなく周囲に取り残されいってしまうだろう。

第四回の会合で河村氏がいみじくも「これからは自分の能力で勝負する時代である。何か専門性を身につけなければならない。」とおっしゃっていたが、資格を取るにせよ、語学を勉強するにしても、

何か新しい事にチャレンジするためには必ずその根底にはきつかけ、好奇心が必要となるはずであるし、好奇心を持つ人とそうでない人では全ての面で大きく人生が変わってくると思う。

我々一人一人が常に旺盛な好奇心を持って新しい知識を取得し、自分自身を高めていくことこそが、これからの不透明な時代には必要不可欠であり、またそれが延いては企業、そして日本の繁栄につながっていくものだと思う。

「人を知る」

数年前、「新人類」という言葉が流行していた。会社に忠誠を尽くし、社業のためには家族も犠牲にする典型的日本人サラリーマンとは異質の、自分の価値観を最も重んじる若者達（かく言う私もこの世代に含まれるのであるが）を世間は新人類と呼び、好意的よりはむしろ批判的に扱っていたように思う。

しかし今の学生達若者を見ていると（こんな言い方をするといかにも自分が年をとったように思えてしまいが）、**“新人類”**とはまた違った感覚、価値観を持っているような気がする。

男女問わずポケベルなどは当り前のように所持しているし、男子学生が女性用のピアスをしている光景等々を見て驚愕の念を持ったのは私だけではないと思う。また余談ではあるが、マスコミによると今の女子中学生の二十%以上がテレクラなるもの（私は断じて利用したことはない）の利用経験があるという。すなわち、所与の環境が大きく違うが故に、当然生まれてくる感覚、価値観も違ってくるはずである。

だが現実には、彼らニュータイプとでも呼ぶべき者たちも数年後には社会人の門をくぐって我々の仲間入りをしてくるのである。いや、その後にはまたまた価値観の全く違う者たちも現れてくるかも知れない。

これまでのように組織の中に似通った感覚・価値観を持つ者が多数存在することはもはやあり得ないと思う。その中で「最近の若いものは」などと言って価値観の善し悪しを論じてみた所で何も生まれるはずがない。むしろ自分とは全く違う価値観を積極的に受け入れていく姿勢がなければ、これからの組織人としては失格と言えるだろう。その意味においても、「人を知る」ことの重要性は今後一層大きくなっていくのではないだろうか。

「心の因り所」

私が大学時代に属していたゼミのモットーが「よく学び、よく遊べ」であった。（「よく遊び、良く学べ」ではない。）社会人になったのであるから今言うならば「よく働き、よく遊べ」となるが、要は本業に懸命に取り組むとともに、一方で自分をリフレッシュさせる時間を持つという、バランスの取れた生活をせよということである。私自身実感しているのであるが、これが簡単なようで実際は意外と難しい。

確かに今の日本は欲しい物は何でもすぐ手に入るようになったし、欧米レベルにはまだ達しないとはいえ、時間的なゆとりも増えてきた。この傾向はよほどのことがない限り大きくは変わることはないと思う。だが逆に何もかもがあり過ぎるがゆえに、本当に自分が「心の因り所」とできるものを見

つけられない人（私も含めて）が多くなっているのも事実だろう。

最近、様々な新興宗教に入信したり、高価な自己啓発セミナー等に通う人が増えているのもその一例ではないだろうか。

思えば今年の産政塾に講師で来られた方々は、それぞれ立派な表（本業）の顔を持ちながら、確固たる心の因り所を持っていらっしやった。平野氏はNGO、河村氏はシャロックホームズ、そして吉橋氏は釣りといったように。

世の中が日々移り変わっていくからこそ、我々は本能的に心の奥底で、いつまでも変わらない普遍なるものゝ因り所を求めるのかもしれない。日々の変化がさらにピッチを上げていく中で、どのような「心の因り所」を見つけることができるかが「表の自分」にも大きく影響してくるであらうし、その度合もますます大きくなるに違いはないと思う。

三、自分自身を見つめて

徒然なるままに随分と偉そうな事を書いてしまったが、現在の自分はとてもじゃないがこれほど偉そうな事を言えた義理ではない。

入社して五年半、改めて社内外を含めたこれまでの自分を振り返ってみても、どうしても「日々何とか仕事をこなしてきた」という思いが最も強く残ってしまう。人事部という恵まれた？部署で、周囲の状況変化や様々な情報を比較的キャッチしやすい環境にありながら、自分で心から満足できるような事は何一つできなかったように思えてならない。（ちなみにまだ結婚もしていないが。）

この論文で思うがままに書いた事も、詰まるところそういう自分への反省、及び将来の自分への戒めから出てきたのだと思う。

シャネルの創業者、ココ・シャネルの言葉で、

「二十歳の顔は、自然の贈り物。五十歳の顔は、あなたの功績。」

という名言がある。年齢を出して申し訳ないが、河村氏にしても吉橋氏にしても、実に“いい顔”をしていたと思えるのは今回の産政塾参加者の中で私だけではないだろう。

私も順調にいけばあと三十年は働くことになるだろうし、現在の不摂生な生活を差し引いてもその後何年かは人生を過ごすことになる。将来自分も他人から“いい顔”をしていると思われる様、黄金の鳥ジパングと共に前向きに飛び続けていきたいと思う。

最後に、井の中の蛙であった私に大きな刺激を与えてくださった産政塾、そして参加された方々にこの場を借りて感謝の意を表したいと思います。一年間ありがとうございました。

「吾れ、三十にして○△×」

豊田合成㈱ 人事部

高 井 信 弘



〔プロフィール〕

高井 信弘（29歳）

- 1965年 岐阜県生まれ（愛知県育ち）
 - 1988年 豊田合成㈱入社
購買部にて関係会社管理を担当
 - 1993年 人事部へ異動
労使関係を担当、現在に至る
- 〈家族〉 独身
- 〈趣味〉 テニス、ゴルフ、野球、競馬
- 〈モットー〉 人生楽ありゃ、苦もあるさ

一、もうすぐ三十歳

今回、産政塾を修了するにあたって、「思うこと」「考えること」等を文章にしなくてはいけないということ、「今、一体自分は、何を思い毎日を過ごしているのだろうか？」と考えてみると、日々の仕事や、遊びのことについてばかりのようで、大した事は考えていないのではないかと思い、大変困ってしまいました。

そうして悩んでいると、今、考えるべきことは、第七回会合のテーマでもあった「三十代にすべきこと」に関連して、自分の将来についてではないだろうかと思えてきました。今までは、まだまだ二十代であり（今でも、かろうじて二十代であるが）、若者のつもりでいたが、来年で私も、とうとう三十代に入ってしまった、これからの人生に多少の不安が出てきたからである。孔子は「吾れ十有五にして学を志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲する所に従って矩を踰えず。」と論じているが、私は、はたしてどのように、これから生きていくのだろうか？

二、これまでの人生

私の人生を振り返ってみると、これと言って人に自慢できるものは何もなく、小学校・中学校・高校と勉強もクラブ活動もほどほどにやっていたという記憶しか残っていない。これは、小さい頃からいつも二番手という場所が居心地が良かったと感じていたからだと思われる。このような性格が災い

したのか、受験勉強にあまり真剣に取り組んでいなかった私は、当然のごとく浪人生活を送ることになってしまいました。しかし、今から思えば大学生活も楽しかったが、浪人生活というものも、それ以上に良い経験ができたと自分なりに正当化している。

このような私は、当然のこととして就職に際しても、家から通勤ができ、転勤が少ないという安易な理由（勿論、面接の時はおもってもらいたい志望動機を述べたが）で今の会社に入ってしまった。そんな私も、早いもので、社会人となって今年で、もう七年目となってしまいました。

会社に入って、私は長い長い実習期間（私の年の配属は一月でした）を終え、昨年五月まで、購買部に所属しており、関係会社管理と購買管理の業務を行っていました。さすがの私も、入社当時は、自分がはたしてきちんと仕事ができなくなるか不安があり、人並みに仕事ができるようにと、精一杯（それほどでもないが）でありました。そこでは、自分よりかなり年上の仕入先の方々とお付き合いができ、大変勉強になりました。

しかし、多少の変化はあるものの、同じ様な仕事を数年間続けていると、慣れというものが出てきて、仕事に対する新鮮味が無くなってきました。

三、人事部への異動

そんな昨年の五月に突然、上司に呼ばれ、「そろそろ購買部を卒業してもらおう。」と言われ人事部への異動を告げられました。確かに、その前年の十一月に他の部署から私の課に異動して来た人がいて、次に私が異動の対象であるとは思っていましたが、当時、当社の定期異動は主に十一月でしたし、購

買部内では、私は部内の別の課に異動すると噂されており、大変びっくりしました。後で今回の異動がどういった経緯で行われたのか判りましたが、その時は、寂しいような、嬉しいような複雑な気持ちでした。

人事部での私の仕事は、以前とは、ほとんど関係のない労使交渉等の労使関係についてとなりました。それまで組合活動というものには全く関心がなく、春闘についても意識していなかったのが実態でした。ですから実際に労使交渉がどの様な内容のものかも知りませんでした。加えて、組合員でもある自分が、労使交渉時に会社側の資料を作ることにも戸惑いを感じました。今でも多少疑問は感じますが、最終的には、会社の組合も「会社の長期安定的な発展を目指している。」と思い、今は資料を作っております。しかし、ここ数年決まって行われる冬の賞与再協議を見ると、組合員に経営状況が厳しい事だけを訴え、リストラと言って経費・残業等の削減を行っているが、それはそれで重要なことではあるが、逆に、どうやって売上を伸ばすかといった、将来に向けての具体的な施策をもっと示すべきであると思っております。

さらに、今年の八月からは、組織変更に伴い人事管理制度に関する仕事も一部担当することになり、経営資源の中で、人に係わる部分が如何に重要であるのかが判りかけてきました。このように、部署が変わることにより、今までとは別の観点で物事が見れるようになり、いい刺激となっています。（また数年後にも、同じ様な事を言っていると思う。）

四、産政塾で学んだこと

こうして人事部への異動をきつかけに、第五期の産政塾に参加することになり、第一回目の会合に出るまでは、「何か難しいことでも議論し合うのであろうか？」と多少不安に思っていた。しかし、実際に参加してみると、講師の皆さんは、様々な分野で活躍されている方々であり、自分の知らないことを知り視野を広めることができたと同時に、これからの人生を考えるヒントを与えていただいたと思っている。

松下政経塾への体験入塾では、同世代の若者が、日本や世界の未来について真剣に考え、それぞれの視点で研究し活動していることを知った。そんな彼らに比べ私は、自分の将来のことすら、あまり考えていなかったが、この体験入塾によって、もっと物事は大きな枠組みの中で考えていく必要があると、つくづく実感させられました。

また、第四回会合の三菱商事のシャローキアンである河村氏やアユ釣り名人であるトヨタ自動車の吉橋氏を見ると、会社以外にも、趣味を通じて、ちゃんとした自分というものを持っていて、大変羨ましく思いました。今後、高齢化社会を迎えると、益々、両氏のような考えで生きていくことが必要になってくるのではないだろうか。

その他にも、自然や昆虫を通してお話しをされた名和氏等（等と言っても、私は第三回会合を欠席しているので、これで全部である）、非常に興味深い話ばかりでした。それ以上に、決して異業種ばかりのメンバーではなかったが、社外の方々と知り合うことができ、大変良かったと

思っています。

五、明日からの自分に

先にも述べたが、これまで何となく時の流れにまかせ、生きてきた私だが、三十歳という人生の節目に際し、産政塾に参加できたことは、今後の自分の人生を考えるうえで、非常に有意義であったことは間違いない。

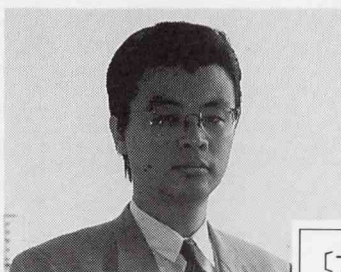
年をとると、人間は自分の常識で物事を決めつけるようになるが、私は、今後とも、広い視野に立った発想と判断ができるように、時代の変化に柔軟に対応し、変な固定概念を持たず、新しい知識を吸収していく姿勢を持ちつづけていきたい。そうすることにより、新しい自分が発見でき、充実した人生が送れるであろう。今は、全ての資本となる体力の維持向上に努め、自分の生き方を模索しつづけていきたい。

最後に、産政塾第五期生の皆さん並びに事務局の皆さんに心より感謝を申し上げるとともに、今後とも、交流を図っていただくことをお願いしまして、私の「思うこと」「考えること」を終わらせていただきます。

いかに生きるのか

アイシン精機㈱ 人材開発部

長 尾 基 晴



〔プロフィール〕

長尾 基晴 (30歳)

- 1964年 愛知県名古屋市生まれ
- 1990年 アイシン精機㈱入社
現在人材開発部に所属
- 〈趣味〉 競馬
- 〈モットー〉 自分にあきらめるな
- 〈家族〉 戸籍上の妻1人娘1人

はじめに

今から書く事は、私の心の中の三人の自分が言っている事だ。その三人を自分A・自分B・自分Cとする。(今は、自分Aの言葉である) 私は今から書いていく文章が冊子となって残っていく、この機会に自分B・自分Cに言わせたいことがある。そして、これからの生活の中で、時折その冊子を引っ張り出し、その時の自分の目に触れさせてやりたい。従ってこれから出てくる文章は、他人に読まれることを主眼としていない部分があるのでその点ご容赦頂きたい。『なんでもあり』ということなので……)

だいたい最近のあんたは一体なんだ(自分Bから自分Cへ)

悩みを言えば、給料の高い低いだの、天気具合だの、身体の調子だの、下らん事ばかり悩みやがって。身体が丈夫だって、長生きしたって今のお前じゃなんにもならねえよ。

何に対しても心から関心を抱くことができず、ただ飯を食らい、予定をこなし、習慣ばかりで一日を埋め、下らねえ自分を軽蔑することもできず、自分の気持ちに正直だと開き直ってやがる。そういうのは一番楽な生きようよ。自慢たらしくするんじゃねえよ。

あんた……適当に生きようと考えているんじゃねえのか? 体裁のいい仕事に就いて、女房もらって、子供つくって、平和ならいいって考えてるんじゃねえだろうな?

あんた、最近自分の事を、『世を忍ぶ仮の姿』なんて言っている様だけど、いつ本当の姿になるんだ

よ。三十にもなってモラトリウムもねエだろ。

以前のおんたはどうしたんだよ

昔のおんたの口癖は、こうだったよな。

『人間は給料の高だの、天氣の良いことを喜んだりするだけの存在じゃない。その氣になれば、いくらでも深く、激しく、ひろく、やさしく、世界を揺り動かす力だって持てるんだ。』

偉大という言葉が似合う人生だってあるんだ。自分をみがくんだ。世界に向かって、俺を重んじよ、といえるような人間になるんだ』

昔は目輝かせて言ってたじゃねえか。おんたの影響を受けて流れから外れていったヤツは一人や二人じゃねエぞ。

今のおんたは、このまま暮らしてりやそこそこいくとか、どうせたいした未来はないとか、自分に見切りをつけているように感じるよ。

昔のおんたは、自分をなんとかしようとしていた。何かをいつも求めていた。どうせ人生こんなもの、なんて訳知りになることを嫌っていた。

身体にこびりついた殻を取れ

まず、サラリーマンであることを忘れる、女房のいることを忘れる、子供を忘れる。そして耳を澄ます。自分が何をしたいのか、本当は何を求めているのか。

やっぱり子供の成長か？家庭円満か？金か？健康か？恋か？若い女の肌か？今とはまったく違う人生、別の女との別の人生か？――

あなたの求めているものは何だ？

いいかよ、あなた、オレにこれだけ言われてなんとも思わねえのか？最近オレのこと忘れてるんじゃないねえのか？

わかってるよ（自分Cから自分Bへ）

君に言われなくなったって、そんな事分かってるよ。しかしな……

こっちの自分も大変なんだ。メシの心配をし、暮らしていくための金を数え、着るものの心配もしなきゃ、子供なんか育てられない。生活するということは、ありきたりの連続だ。自分ひとりのことだけを考え、並の人間とは違うようなつもりでいる君に、そんなこと言う資格はない。

今の自分を支えるものもあるんだ

生活者としては、ありきたりかもしれないが、仕事には、好奇心もあるし、感動もする。自分のプライドをかけるに値するものだよ。今ボクは、社員の評価（昇格の評価とか、賞与の評価）に関する仕事をやっている。社員は一人余りだが、社員一人一人の生活や、会社の組織にも結構関わる、影響力のある仕事だ。

この仕事は、客観的に見ても、質・量とも決して簡単なものではないと思う。しかしボクは、いつ

もこう思いながら仕事をしている……

『その位のこと、オレが絶対やり遂げてやる。本気になれば何だってできる。しかも仕事をやらされるんじゃないくて、自分で新しい仕事を作ってやる』ってね。

だから君が言うほど、自分に見切りをつけてはいない。仕事は面白いし、それに自分の持てるパワーをつぎ込んで目標を達成するのは、本当に気持ちがいい。

今のボクの生き方は間違っていないよ。

誰だってあることだ

君が最初に言った『下らん悩み』ってのは、誰にでもあることだ。別に開き直るって訳じゃないが、ボクの年齢で女房も子供もいりゃもう少し金もほしい。いまの働きからすれば、割りが合わないとも思う。だけどこれは単なる愚痴だ。そんなこと言うヤツは、大したことないって分かっていってるんだ。さっきも言った様にボクを支えているのは、金じゃないってこともわかっていっているんだ。

自分でよくわかって言っているんだけど、たまには他人に聞こえる様にそんなこと言ってみたくないじゃないか。

『仕事の面白さ九割、金一割』このお立ち台に立っているかぎり、今の自分のままで十分だと思っているよ。

やぐいじ (自分A)

私の中には、私も含め三人の自分がいる。私はいつも他の二人を冷たく客観的に見つめる役割。

自分Bは、

『いまのあんた、なんてエ幕らしをしてるんだ、会社なんて小さい事いうな、あんたはもっと凄いことができるんだ。自分に見切りをつけちゃいけない』と罵声を浴びせかける。

しかし、自分Bも一生懸命な、ありきたりといえればありきたりな生活者(自分C)の働き方を真っ向から否定できないようだ。

また、自分Cも

『家族を守り、仕事は真面目にやっている。それだけか？って言うかも知れないが、それだけだってどれほど大変か知れやしない。自分ばかり正しく生きているような気になるな』

と自分Bに食ってかかる。

ただ自分Cもこう思っている自分Bの言うことを聞いていると、私もその気になれば結構意外な事がやれるような気がする……

自分Bも自分Cも「こうすべき」というように抽象的な本質に対して言ってるんじゃない。自分を具体的・個別的な存在として認識し、それを取り越え、立ち出るとはどういう事なのか？いま実存する自分に問いかけているのだ。

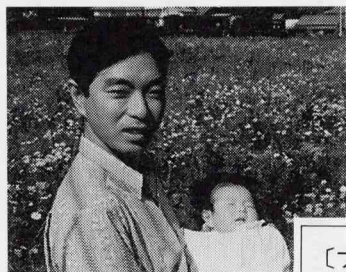
私は、AなのかBなのかCなのか、それとも三つのバランスなのか？最近ますます分からなくなっている。

以上

効率化と人間

日本電装労働組合

洲崎 典之



〔プロフィール〕

洲崎 典之（33歳）

- 1961年 名古屋市生まれ
- 1984年 日本電装㈱入社
営業企画室にて、営業部門の情報
管理・システム開発を担当。
- 1990年 日本電装労働組合へ出向。
現在に至る。

〈家族〉 妻、長女

〈趣味〉 スキー、ハイキング

〈モットー〉 くじけず、おごらず

はじめに

私は昭和三十六年九月二十八日、あの金山で有名な新潟県の佐渡が島で生を受けた。佐渡が島は母の故郷であり、いわゆる里帰り出産である。そして、父の実家のある名古屋（千種区）に住み、その後父の仕事の関係で安城、東京（学生時代）、就職でＵターンして安城、再び名古屋（緑区）そして今は結婚して豊田の社宅に妻と子供とともに住んでいる。

子供の頃

私が子供（小学生）の頃住んでいたのは名古屋の千種区、地下鉄の駅でいうと東山線の今池と池下のちょうど中間に位置する仲田というところだった。この頃の楽しみは何といても学校が終わった後の草野球で、クラス別にチームを作って今日は一組と試合、明日は二組と試合といった様に、スケジュールを組み、試合のない日はクラスの中で「地獄の特訓」と称して毎日毎日、日が暮れるまで泥だらけになって遊んだ。勿論、たまたま良い当たりが出て、近くの家のガラスを割ったこともたびたびであった。

また、もう一つの楽しみは、毎年夏休みに両親と佐渡へ行き（後から聞いた話では、毎年一回は必ず母親が里帰りする事が結婚の条件だったらしい）、従兄弟と共に海へ泳ぎに行ったり、昆虫採集をしたり、名古屋ではなかなか出来ない大きな連発式打ち上げ花火をすることであった。昆虫採集の時、誤って蜂の巣に触れてしまいボコボコに刺されたのも、今は良い思い出である。

変化

丁度一年程前、十数年ぶりに私の育った「仲田」を訪れた。これまでも何度も車で前を通った事はあったのだが、結婚前に一度自分の育った所を見たいと、柄にもなく感傷的な思いに耽り、車を止めて今回は歩いてぐるりと回った。予想通り、子供の頃遊んだ空き地は全てアスファルトの駐車場かアパート・マンションの類に変わっていた。近くの銭湯もなくなっていた。時代の流れからすれば当然の事かもしれないが、無性に寂しさを感じたと同時に、今この近辺に住んでいる子供たちはどこで毎日遊んでいるのか、小学校の運動場か、はたまた、やはり毎日部屋の中でファミコン三昧か……ふと、人ごとながら考えてしまった。

効率化と人間

確かに効率化によって人間の生活は素晴らしく発展した。「仲田」の様な都市開発でも土地の効率的な活用によって、駐車場不足や住宅不足が解消され便利になった。サラリーマンでもマイカーを持つことができる様になり自由に移動したり遊びに行ける様になった。身の回りにあるほとんど全ての家電製品は世に出た当初、とても手の届く範囲でなかったものも、効率化によって大量生産が可能となり、安く手に入る様になり且つ機能もアップした。しかし、本当にそれだけでいいのか……。

私が入社して最初に配属されたのは、営業企画室という部署であり、営業部門の業務の効率化と、

販売促進をより行いやすくする為の情報システムの開発が主な業務だった。この業務の特徴は必ず定量効果というものが必要（他の業務でも同じかもしれないが）なこと、ロジック（論理）さえ正しければ必ずコンピューターが自分の望む結果をだしてくれることである。

そして六年後、縁あって労働組合の専従執行委員となった。ここでも定量的な効果やロジックは大事な事だが、それより大事なものがある。それは「気持ち」である。どんなに素晴らしい効果やロジックがあっても、組合員全員の気持ちが悪ければ、NOである。（もちろん「気持ち」だけで判断してはいけないが、常に念頭に置かなくてはならない）

企業が効率化を求める事は当然であり、仕事を進める上で効率を念頭に置くことは必要不可欠である。しかし、全て効率でものを片づけてしまい、「気持ち」をおろそかにしてはいないだろうか。一見無駄と思われる仕事や作業の中にも、「気持ち」という面で必要なものもあるかもしれない。効率化を錦の御旗にして、自分のロジックを無理矢理押し通しても、良い結果は出ないだろう。そして何より次の世代を担う今の子供たちが、塾へ通うことに一生懸命になったり、ファミコンで人を倒す事に夢中になって、泥だらけになって遊ぶことを「非効率」とか「無駄な事」と考えてしまふ様にならないだろうかと時々不安に思う。泥だらけになって遊び、時には友達と取っ組みあいのけんかをしてけがをしたり、泣かしたり泣かされたりしながら「人の気持ち」を考えるようになるのだと思うからである。

産政塾を終えるにあたって

昨年（一九九三年）の十二月から今年（一九九四年）の約七カ月間の産政塾の活動で、実に様々な方の話を聞いた。PKOに自ら応募しカンボジアへ行った方、災害救助のあり方について考えている方、NGOの一員としてバン格拉デシュの援助に力を注いでいる方、私たちと同じサラリーマンでありながら、シャーロックホームズ研究家として第一人者となっている方、昆虫研究に一生を捧げている方……。こうした方々は、常に「自分の気持ち」や「人の気持ち」を大切にして、物事を打算や損得で捉えていない。従って、その話には一つひとつ意外性と説得力があった。また、今回の産政塾で一緒になったメンバーと酒を飲みながらいろいろな話をする中で、様々な業種・企業・組合の事情や気持ちという点で共通点もあったし、新たな驚きもあり、また一つ視野が広がった気がする。仕事を離れたこの出会いはこれからも大切にしたい。

私事ではあるが、今年の八月二十二日に長女が誕生した。名前は、「人をいたわる優しさを忘れず、勇気を持って強く生きてほしい」との願いから、平仮名で「ゆう」と付けた。今回の産政塾を通じて得た事・感じた事を、これからの長い人生の中で、一人の人間として、一人の親として実践していきたい。

「人間って変わるもんだ」

アイシン労働組合

渡 辺 潔



〔プロフィール〕

渡辺 潔 (37歳)

- 1957年 愛知県豊川市生まれ
- 1981年 アイシン精機㈱入社
生産技術部配属
西尾工場にてダイカスト鑄造を担当
- 1992年 アイシン労働組合アイシン精機支部専従執行委員
現在に至る

〈家族〉 妻 まゆみ (32歳)

長男 潤 (6歳)

長女 由佳 (4歳)

〈趣味〉 家族一緒のスキーとキャンプをしながらの旅行

〈モットー〉 何事もプラス思考で

今回、第五期『産政塾』に参加でき、うれしく思っている。「自分の所属する会社や組織の枠から一歩踏み出して、その枠の外から自分や社会を見つめなおし、異業種の人達と語り合ってみよう」というものである。私は、今までの仕事柄から異業種の人達と接する機会はわりと多く、仕事を越えていろいろな事を語り合えるチャンスもあった。しかし、同世代（三十歳代）の多くの人達との場となると、それは新たなチャンスでもある。

『産政塾』を終えるにあたり、出席することができた四回の会合の中で、講師をされた先生方の講話を聞き印象に残った「人の生き方」について、今一度自分自身を見つめなおし、筆不精の私ではあるが自分なりに書いてみようと思う。

◆先輩と語り合う

「あんたも、ずいぶん変わったねえ」。昨年の秋、入社後に配属された職場の先輩と酒を飲む機会ができた時、最初に出てきた言葉である。

「大人になった」そうである。「配属当時は、生産技術がやっていけるかどうか心配だった」そうである。恥ずかしい話だが、どんな情けない人間だったか、自分で知る限りでは相変わらずの典型的な血液A型の性格の持ち主であり、確かに弱い人間であったかも知れない。

昔から、自分自身で性格が嫌いなところもたくさんあった。A型人間の特徴のひとつでもある「慎重さ」、石橋を叩いて渡るのは良いのだが、度が過ぎて思わず石橋を叩きすぎてしまうのである。「よしっ!」と思い橋を渡ろうとすると、その時にはもう橋が崩れていて無いのである。そんな情けない

自分に対し、持って生まれた性格が何とかして変わらないものと努力してきたつもりだ。

生産技術という仕事も、入社した時から「メーカーに就職するからには、生産技術ありき」との考えから、自らが希望した部署であり、どちらかと言うと人気の無い、決して楽でもない職場であったが、今思うと自分なりに好きになれた仕事である。

生産準備の仕事をするにあたって、質・量・コスト・タイミングの「垂直立ち上げ」は常識であったが、どうかすると得意先のラインストップにつながる事態にも陥る。スタッフ責任者としての私は、的確な状況判断と周囲への指示など、迅速な判断・対応に迫られる。こんな事は当たり前の話であるが、石橋をいつも崩していた私にとっては、自分自身を鍛え上げてもらった出来事でもある。

しかし、自分にはもう一つの武器を持ち合わせていたと思っている。人はいくら能力があっても、一人で出来る仕事量は知れている。周りの人にどれだけ迅速・的確に動いてもらうかが勝負になる。つまり「人間関係」である。

「人間関係」というものは、作ろうと思って出来るものではない。私自身「人間関係」には自信があり自負できることと思っているが、やはり自分の枠内にとどまらないで、いろいろな人と接して話を聞き、自分の頭の構造とは違う人がたくさんいることを、まず認識しなければならぬと考えている。そして、自分の考えを主張する中、相手の良いところはどんどん取り入れていく。腹を割った話ができれば最高である。

今の自分が決して立派だとは少しも思っていないが、少なくともかなりの荒波に揉まれ育ち、ここに生き残っていることから「たくましくなった」ことだけは、自分でもはっきりとわかるのである。

こんな訳の分からぬことを思い、また口にしながら酒を飲む場が持てたことは、とても幸せに感じており、若き時代に自分が目指すべき「人間像」を示していただいた先輩に感謝するとともに、こんな機会をこれからも大切にしていきたいものである。

◆子供の頃からの思い出

幼少からの自分は病弱であり、また姉二人に囲まれて育ったせいもあるのか、性格的には非常におとなしく、無口な「ボク」であったようだ。恥ずかしがり屋のため人前に出るのは好まず、そうだった時は体の震える思いで話をしたことを思い出す。しかし、体を鍛える意味からも、スポーツだけは積極的に参加してきた。

小学校時代は、陸上・ソフトボール部に所属する。授業では自ら進んで手を上げることはほとんど無かった。六年生の時、市内陸上競技大会に於いて走り高跳びで百三十五cmの大会新記録で優勝。通知表によく書かれていたのは「運動は良くできるが、積極性に欠ける」だったと記憶している。アポロ十一号の月面着陸を深夜のテレビ中継で見ながら、ロケット・宇宙に非常に関心を持ち出す。

中学校生活は、ひたすら剣道に汗を流す三年間であった。第二次世界大戦の軍艦・戦闘機のプラモデル製作に熱中し、また夏休みの自由研究に皆既月食や流星群の観測をし、この時に生まれて初めて土星を見たときの感激・感動は今も覚えている。拓郎・陽水の影響を受け、ギターを手にしたのもこの時代である。

高校生活は、野球、サッカーどちらをやるうか悩んだあげく、バレーボール部に籍を置くようにな

る。この世にこんなおもしろいスポーツがあることを大発見してからは、バレーボールに青春を賭けた時代であり、父親と喧嘩をしながら三年生の秋まで続けたものである。自転車によるアウトドアに目覚めたのも、高校2年の春だ。

卒業式にバレー部の顧問としてお世話になった畔柳先生にアルバムに一言書いていただいた。

『生きる』。アルバムをもらう時「お前は、まだ存在しているだけだ。生きなきゃいかん、わかるか!」というコメント付きであった。と言うよりもこれからの人生に対する問いかけであったのかも知れない。「ふーん」その時はそう思ったものの、これから成長していく若者に対し何か物足りなさを感じていたのだろう。

やがて、浪人生活を送ることになるが、今までとは違った生活や新たな人との出会いを通じ、これまでの自分を改めて顧みる時間が持てたことは、非常に有意義な一年であったと思っている。勉強にも全力投球をし、バレーボールも継続してやれた。パチンコの勉強もした。いろいろな事を考える時間が持てた。自分の人生にとってかけがえのない、二度と味わうことのできない時間を過ごすことができた、バラ色の浪人生活であったことは言うまでもない。

こうやって顧みると、子供なりにいろいろな事に出会い、考え、行動してきたものである。いずれにしても、おとなしい性格とは裏腹にスポーツに積極的に取り組み、深い関係を持ちながら過ごしてきた時間が、現在の自分の一部を形成してきていることには違いはない。

社会人になった現在も「仕事以外に、若いうちから何かひとつやれるものを見つけよう」という気持ちに変わりはなく、五十歳を過ぎてもできるような「好きなこと探し」を続けている。

少なくとも、未経験の分野に出会った時には興味を持ち、一度は足をつっ込んで来たものだから、かなりの多趣味人間になっていることは確かである。

◆労働組合との出会い

労働組合の専従執行委員になって、二年が経過した。今までの私の人生の中で、一番短く感じた2年間であった。二年前を思い出してみると、専従執行委員になっていきなり秋の取り組みでの労使協議会に於ける提言、担当工場では年末・年始そして成人式の組合代表の挨拶、次々と今までのことのなかった経験をさせていただいた。

そんな二年間の経験を通じて痛感したことがある。今まで、どになに狭い視野で物事を見たり、考えたりしていたかということである。

生産技術をやっていた頃は、企画及び原価面・品質面・技術面をこなし、ある程度会社の中での位置づけは理解していたつもりであった。労働組合に移り、全社的な立場で広い視野に立たなければならぬ仕事に変わってからというもの、時間に追われて仕事をしてきた今までが、どんなに外が見えていなかったかがよくわかったのである。

こんな事は当然と言われるかも知れないが、労働組合としての提言や答弁では非常に苦勞した反面、自分にとっては良い勉強にもなったと思っているし、いずれは経験するかもしれないであろう事が、今この時期に経験できること、自分の人生にとって必ずプラスになることに対しては感謝を申し上げる次第である。

◆ 今、思うこと

人は、常に「こうしたい」とか「こうありたい」といった気持ちをいだいていると思うが、それはどんなにちっぽけなことであっても、「願望」であり「夢」である。

その実現に向け、私は努力してきたつもりであり、これからもそうしたいと思っている。しかし、自分の努力により「夢」に近づく事もあれば、思わぬ事から全く別の「夢」に変わってしまう、いや変えさせられてしまう時さえある。

シャプラニール東海連絡会の平野先生の話で、ある人との出会いをきっかけに思ってもみなかった世界を知り、考え方から人生までもが変わってしまったこと。小学生まで落語家になるつもりでいたのが、何故か昆虫と付き合いだしてしまったという名和先生の話。両先生にしてみれば、よほどインパクトのある出来事と遭遇したのであろう。

何かのきっかけで、今までの「夢」が大きく変わってしまうほどの経験は私には無いと思っていたが、高校時代に自分の進路についてももう少し真剣に考えていれば、今頃は体育の教員になりバレーボールチームを率いて全国制覇を成し遂げていたかも知れない……とも思う。

何かに出会った時、その人の価値観にもよるが、どれだけその事に問題意識を持ち、真剣に考えるかによっては、性格・気持ち・考え方だけでなく人生をも変えてしまうものである。

家庭を持ったサラリーマンの一人として思うには、やはり今の仕事が生生活の基盤でもあり、自分の力で生きていくことがベースとなっている以上は、より安定度のある生活を望む「夢」はある。当然、

努力し「夢」を追い求めるつもりだ。

しかし、会社人間として、サラリーマンとして成功しても、私にとってはそれだけではつまらないし、寂しいと思っている。仕事以外のことで社会的に評価されるような事などがあってもいいと思うのである。

先ほどからも言うように、私は仕事以外のことで何かやり甲斐のあることを見つけ出したいと常々思っているが、家庭を持ち、子供もある程度大きくなった今は、極力家族一緒に過ごす事のできる何かを求め、模索し続けているつもりだ。

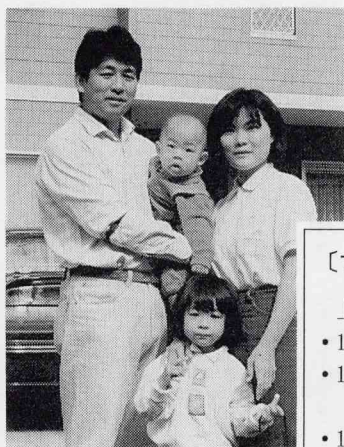
仕事も大事だが、こちらも大事なことだ。将来に渡って両天秤に掛けたとき、決して仕事の方が重くないようにしたいのも、もうひとつの私の「夢」なのである。

いつかまた「今の自分を、さらに変えなければならない時」が来るかも知れない。

最近思うこと

全トヨタ労連

上 田 信 也



〔プロフィール〕

上田 信也 (32歳)

- 1962年 大阪府尼崎市に生まれる
- 1984年 トヨタ自動車㈱入社
海外技術協力部配属
- 1988年 ポルトガル・リスボン大学 及び
S. カエターノ社にて研修
- 1990年 全トヨタ労連役員として専従
- 1994年 トヨタ自動車㈱海生協力部へ復帰
- 〈趣味〉 スキーとウインドサーフィンだった。………最近は専ら育児と読書
- 〈家族〉 妻、長女(3才)、長男(8カ月)

一 会社人としての十年を振り返って

「そう言えば今月で入社して調度十年目なんだよな…」やっと結婚が決まった同期の女の子の送別会でポツリとこぼれた一言に、「もうそんなになるのか…」と思わず我に還ってしまった。

最近老けたとよく言われるものの、自分では極めて若いつもりでいたのだが、言い訳できない事実を突き付けられた様で何か妙に寂しさを覚えた。

入社して十年、人並みに奥さんをもらい、子宝にも恵まれ、その上家のローンにまで恵まれて、老ける理由に心当たりが無いわけではない。ただその間、海外で再び学生をやったり、労働組合の専従役員になったりと思いきやかけない環境の変化の中で、老ける暇さえないほど動き回っていた為か、気持ちだけは若く十年も経てしまった事が自分の事として信じられない思いであった。

「一体この十年間何をやってきたのか。」また「これから何をすべきか」、十年に一度しかない折角の機会でもあるので産政塾で感じたことも踏まえて書き綴ってみたい。

「会社人としての初期化」

入社してからの四年間、学生気分も抜け切らない新入社員の一時期を過ぎた後は「会社のためになる事は全て良い事」式の発想で手前味噌ではあるがとにかく頑張っていた。

時間をかければ成果が上がるような仕事であれば、自分の時間を削ってでもよりベターを求めたし、生活の中心に会社があった。

人の所為にするわけでは無いが、脱サラやフリーター等が稀の稀で頑張れば将来報われる式の考えが時代の主流でもあり、鬼軍曹の様な諸先輩に引きずられとにかく頑張った。

ベッカーの「日本の終身雇用を前提とした賃金体系と年齢の関係」ではないが、この時期は労働の成果以上の賃金を貰っている時期でもあり、金銭的には働きすぎたと言う表現は適切ではないだろうし、又それ以上に学んだことが遥かに多い事を考えると、誰かを恨むとか言うものではない。

しかし「三つ子の魂百まで」では無いがこの四年間で出来上がってしまった「仕事に対するくそ真面目な姿勢」や「会社に対する忠誠心のようなもの」は、身体に染み付いてしまい、その後六年間会社を離れていたにもかかわらず、こう言う姿勢の部分は何も変わっていないと思っている。

「外海に出てみて」

その後海外研修生としてポルトガルに二年間住むことになる。

初めての海外生活で、しかも文化習慣の大きく異なるヨーロッパであった為、一通りのカルチャー・ショックを受けた。更に海外の人、組織の外の人と接して「先進国で経済大国日本の国民という称号」と「現実の自分一人の能力」の差も改めて思い知らされたし、「組織としての考え方」より「自分としてどう判断してどう言う意見を持っているか」の方が重要である事も何と無く理解できた。

又何にも増して、家族に対する考え方については色々考えさせられる機会が多かった。

二年間の研修の内一年目は学生として大学へ通い二年目は業務研修を行うのであるが、通例一年目は私も含め妻帯者は単身で赴任し学業に専念する。寂しくはあるが、それはそれとして学ぶことも多

いし何しろ自由だ。

しかしそう言うロジックを平気で言えるのは日本人に対してだけで、これを欧米人に話すと間違い無く変人扱いされる。

「奥さんと仲が悪いの?」とか、「そんな非人道的な会社を辞められない理由でもあるの?」と特に女性から攻め立てられる。「うちの会社から海外研修に行くと、普通単身赴任で学業に専念する」とか言おうものなら「奥さんがいると、学業に専念できないのか?」とか「そんなに勉強が好きなのか?」と聞かれる。自分も変人扱いされる程学業に専念したかったかと言われると、実際の所それ程勉強は好きな方では無いから性が悪い。

日本であれば、「会社の方針ですから」とでも言っておけば大体「大変ですねえ」と皆納得してくれるのであろうが、議論好きなこの国でその一言を口にしようものならそれこそ一晩でも議論してくれるだろう。

又欧米では、行動の最小単位は家族(或は夫婦)であるのが一般的で、単身赴任時代レストランで夜一人で食事をすると平日でも殆ど周りには楽しそうな家族づれである。そんな国で家族と離れて学業に専念している事は確かに奇異に映るのかもしれない。

何事もそうであるが教えられて頭で学ぶより、経験から身体で学ぶことのほうが遥かに心に刻まれる。帰国後はその反省を活かして組織に捕われず、常に自分の意見を持ち、仕事と私事を切り離し、毎日の定時退社後と休日は家族と過ごそうと心に強く決めた：はずであった。

「パラダイムの変換」

ポルトガルでの研修から帰国する直前に次の勤務先を聞いた。労働組合である。

正確に言うとは候補しろと言う強要に近い要請を受けたと言う表現が正しいのであるが、前述のような貴重な体験をした割にはその反省を活かすこともなく、恐いもの見たさ半分逆らいもせず、労働組合の役員として四年間も勤めてしまった。

組合に来て一番戸惑ったのはロジックの変換を求められることである。

例を上げるなら、企業は利益を目的とする機能体としての性格を強く求められるが、組合はそのメンバーの幸せを目的にする共同体としての性格を強く求められる。従って前者のキーワードは「利益とその効率の追求」であるが、後者は「合意であり数は力」である。仕事の進め方が大きく変わる訳で、まさにパラダイムの変換であり、慣れるまで結構時間を要した。

さらに自分がいた全トヨタ労連の様な企業内組合の連合体は、企業内組合と産業別組合との間に立ち、本音とたてまえの狭間に立たされる。各組合の現実的な悩みと社会全体を見渡してある程度理想的なことを言わなければいけない産別組織の双方の立場を理解しなければならぬから結構骨が折れる。特に自分が関係した海外の組合との交流に於いては、各国中央組織とその上部団体に当たる本部機構との間に前述と良く似た関係があり更にややこしい。

又、中央集権的な上部団体に個人が加盟し企業とは対立と言うイメージが強い欧米の組合と、企業別の各組合にかなりの自主性があり協調を大切にする日本の労働組合とでは、自ずと発想も異なる。こ

の為海外の色々な立場の組合役員と話す場合、常に相手のロジックを充分理解していないと極めて自己都合的であると受取られてしまう。

いずれにしてもこの四年間、家庭人としての評価は聞くまでもないが、多くの事を学んだ。

二 生き方

「産政塾で学んだこと」

今回産政塾で何度か各方面の達人のお話しを伺った。基本的には「生き方」にスポットが当てられた人選だった様に思う。講演いただいた方を独断で分類すると、それ自体が人生の目的となっている「松下政経塾やNGOシャプラミール」、一方人生を楽しくする為のプラスアルファでの達人「シャーロック・ホームズ、昆虫及び釣り」ではないかと思う。どの方のお話もそれぞれの人生の重みが表れていて興味深かったが、なかでも一番感銘を受けたのはシャーロック・ホームズの河村幹夫さんであった。

それはひとつには、自分の不得手とする分野……「人生を楽しくするためのプラスアルファの達人」であったこと。もう一つは組合に専従になってから何と無くもやもやしていたものに一つの答えを示してくれたことである。

人間には三つの顔があるとよく言われる。社会人として、職業人として又家庭人としての顔の事で、この三つの顔のバランスが取れていなければならないと言われている。自分は職業人以外の顔に特に

自信がない事もあっていつも心に留めている言葉であるが、一つ釈然としない事がある。

それは、「それぞれどんな顔をすれば良いか…、つまり分類ではなく、何によってそれぞれの方向性を見出すか？」である。

自分としては宗教がその役割を果たすと考えているが、自分も含め特に宗教を持たない人はどう言うスタンスで社会人、或は職業人、家庭人として行動すべきか？

同氏曰く「ヒューマニズム」である。その言葉自体かなり漠然としているし、そのものずばりの答えと確信している訳では無いが、いろいろ考えてきたなかでは今の所一番しっくりしている。

「自分の将来と重ねて」

産政塾に学んで異なる職業の方々と色々意見を交換出来たことと、前述のようにこれまでの人生を振り返るチャンスを与えていただいたことに本当に感謝している。

さてこれからどうするか？ ヒューマニズムを基本に三つの顔をどう研いでいくかであるが、まずは一番弱い家庭人としての顔を何とかしていきたいと思う。「職業人としての顔の確立が先だ」と言う方も多いと思うが、新入社員の時から仕込まれた忠臣蔵のような会社への忠誠心と、仕事を目の前に出された時のハバロフの犬のような条件反射的なまじめな取り組みは、残念ながら簡単には抜けてくれそうには無いし、従って大して心配もしていない。

これからは少々時間がかかっても、家庭と言う単位で人生を楽しくするプラスアルファを見付けていきたいと思う。これだ…と決めてかからず、色々試行錯誤しながら、夢をもってやっていきたい。

会社生活10年間を振り返って

トヨタ車体労働組合

杉 浦 一 成



〔プロフィール〕

杉浦 一成 (33歳)

- 1960年 愛知県生まれ
 - 1984年 トヨタ車体轉入社
経理部経理課にて財務関係、固定資産管理を担当する。
 - 1992年 トヨタ車体労働組合専従執行委員
現在に至る。
- 〈家族〉 妻(弘子)、子供(慎一郎 2歳)
- 〈趣味〉 自然とのふれあい

一 はじめに

十二月十七日に第五期の産政塾の一人として参加させてもらって、はや十カ月が過ぎようとしている。開塾式の日は奇しくも私の三十三回目の誕生日でもある。

これは、三十三の誕生日に「人との出会い」をプレゼントしてもらったのかもしれない。一年間で七回のチャンスを与えてくれたが、業務の都合で出席できたのは三回となってしまった。特に第七回会合に参加できなかったことは非常に残念である。この一年間、産政塾を通して感じたこと、あるいは三十三年間の人生の中での「運命」また「人との出会い」についてこの機会に振り返ってみたい。

二 入社後十年間を振り返って

昭和五十九年四月に右も左をわからずに社会人として歩み始めたのが、いまから十年前である。「トヨタ車体株式会社経理部経理課」これが私の初めての職場である。担当業務は固定資産管理で千億円の資産の管理である。口で言うのは簡単であるが実際書こうと思うとゼロの数さえわからないのが、当時の私でした。固定資産の管理と並行して財務関係の業務も担当となり、学生時代のゼミが「会計学」であつたにもかかわらず、学生時代以上に勉強した二年間であつたと思う。私の今までの会社生活の中で一番苦しく、かつその反面やりがいいもあり、非常に勉強になった時期だつたと思う。学生時代の甘い気分は吹き飛ばされ、人間関係の重要性や「和」の大切さ「忍耐力」を学んだのもこの時期である。事務系に配属された者は、通常三年〜四年でローテーションの対象となり、いろんな

職場を経験するのであるが、私は一つの職場で八年間過ごしてきた。そして唯一変わった職場が労働組合であった。今までと違い計算と法律の知識では解決できない百八十度違う職場である。会社生活十年間のうち八年間は経理という職場で「数字の難しさ」と怖さ」を学びこの二年間の労働組合生活では、「人との繋がり重要さ」「家族との会話の重要さ」を体験させてもらった。会社と組合どちらがいいのか、今の時点では結論はでない。

三 結婚そして家族

私が結婚したのは、会社に入社して二年目の二十五歳の時である。通常より少々早いものだと思う。同期入社の中では二番目であった。妻との交際期間も長かったため、普通より早い結婚となった。今、思えばこれで良かったと思う。なぜなら、「入社二年目で会社の仕事もまだ十分覚えていない者が結婚なんか、なまいきだ。」と言う人さえいたが、かえってその言葉が私に「闘争心」と「責任感」を与えてくれた。結婚したのに仕事も満足にできないと言われるのがイヤであった。私の結婚にはもう一つの障害があった。それは、妻は二人姉妹の長女である。私は長男のため世間では後継ぎと言われている。言うに及ばず私の住んでいる町も田舎であり周囲の人の目もあった。そのため妻は長男の嫁になった訳である。それも義父母と同居である妻に「あなたは仕事に出かければ夜中まで帰らないのだから……」と言われるのが私には大変つらかった。

そんなある日、私たち夫婦に衝撃的な事件が起こった。妻の父親が勤務先で倒れたのである。前日まで元気な仕事をしていたのに……。連絡は私のところにも入った。急いで病院に駆け付けると

「病名は心筋梗塞」と聞かされた。その時は顔色も良く口も聞けたので安心していたら、翌日左半身がマヒを起し言語障害が起った。それからというもの、毎日の生活がガラッと変わった。妻の母親は病院に付添い、妻は八十歳の祖母の世話をするため、実家に泊まり込むことになり、私も一緒に妻の実家での生活が始まった。私は通勤時間で十五分くらい長くなったが、やむを得ないと思って三ヶ月間、妻の実家で生活をした。悪いことは重なるとは、よくいったもので、今度は私の父親が「脑梗塞」で倒れたのである。幸い、症状が軽く入院まではしなくて済んだ。妻の父親の手術も成功し、言語障害は回復したが、左半身のマヒは後遺症として残ってしまった。

妻の祖父が他界したのもその半年後であった。ほんの二年く三年の間に私の周りに様々な出来事が起り、まるで「天中殺」かと思うほどである。

四 妻の病氣と家族の誕生

私が、今、労働組合で仕事をしているのも妻の助言があったからかもしれない。実は私たち夫婦には、なかなか子供ができませんでした。結婚して三年目くらいから、周囲の人からも子供は？と聞かれたりするのがイヤでしかたなかった。妻は私以上につらい思いをしていたと思う。嫁と姑の関係もさることながら、普通の人は悩まないようなことで神経を使い本当に頭が下がる思いである。

そんな私たち夫婦に子供が出来たのが結婚七年目である。半ば諦めており、夫婦で仲良く過ごしていけば良いのではないかと、思っていた時である。労働組合への専従の話があったのも丁度その時であった。なにか因縁めいたものを感じると同時に、不安感で一杯であった。労働組合の仕事というと

結果のないようなもので、「やってあたりまえ」「やらなければ何故やらないのか」と言われる職場である。今までの経理の仕事と違って答えのないような職場に戸惑いも多くあった。

そんな時の妻の一言が私に決心させてくれた。「子供もできたし、これを機会に環境を変えてみるのでもいいかもしれない。…」自分でも一つの職場に長くいすぎた感もあったし多くの人と出会えるいい機会かもしれないと思った。会社にいる時とは比べものにならない程、多くの人と出会えたのも事実である。

そんなある日、妻から「手術をしなければいけないかもしれない」と相談された。私には、なんのことも全くわからなかった。よく話を聞いてみると以前から腹部が痛かったということだった。それまでいかに妻と会話していなかったかという事を痛感した。病名は「卵巣腫大」ということだった。悪性のもものはガンである。妊娠五カ月で手術をすることになった。妊娠中の手術であり、「最悪の場合は胎児はあきらめて下さい」という医者言葉は、私にも妻にもショックなものだった。結婚七年目にしてできたのに…。

妻は「どうして私はこんなに運が悪いのだろう」と、いつも言っていた。しかし、手術は成功し、腫大も良性のものと判明しその年の九月に長男が無事誕生した。

五 三十三歳の今思うこと

労働組合の仕事をして、はや二年が経過した。長男もいまでは二歳になり、毎日我が家は戦争のよう日々を送っている。とりわけ妻は大変である。私は毎日帰宅が遅く、子供の世話は殆ど妻に任

せっきりになっている。これが一般家庭の標準なのかもしれないが、妻にはそれが理解できないようだ。確かに今まで妻が経験してきた幾多のことに比べればもっと協力してあげなくてはならないのかもしれない。最近つくづく思うことは、仕事と家庭を両立させることである。普段家族サービスできない分、休日には極力家族と過ごす時間をとっていききたいと思っている。労働組合も今年改選の年で、新たに四名の新人が入ってきた。二カ月経過した感想を聞いてみると、やはり「家族との時間が少なくなつた」と言っている。しかし、私が思うに時間は自ら作り出すものであり他人から与えられるものではない。仕事と家庭の両立は不可能なことではない。個人の意識で変えられるものである。

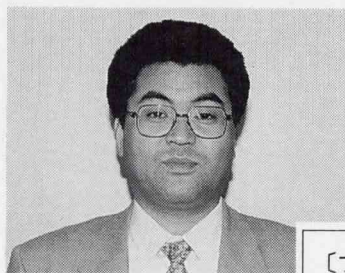
六 おわりに

産政塾のⅤ期生として一年間勉強してきたが、業務の関係で参加できた会合は少なくなつてしまつたが、人との繋がりは広がつた。業種を越えた交流は今後も必要である。「組合活動の原点は職場にある」といいますが、職場Ⅱ仕事を支えるのは家庭である。家族の協力なくしては、良い仕事、良い組合活動はできないと考える。そういった意味も込めて今回の論文？では、家族を中心に会社生活十周年に私のまわりに起こつた出来事を印してみた。最後に、塾で話し合い、そして体験したことは、私の肥やしとして将来の自分に大きな影響を与えてくれると思う。短い間でしたが、本当にありがとうございました。

「21世紀の日本社会」

中部電力労働組合

内 田 厚



〔プロフィール〕

内田 厚（34歳）

- 1960年 三重県三重郡菰野町生まれ
- 1979年 中部電力㈱入社（四日市営業所、桑名営業所、津支店勤務）
- 1993年 中部電力労働組合本部執行委員
現在に至る

〈家族〉 父・母・妻・長女・長男

〈趣味〉 野球・サッカー

〈愛称〉 クマさん

はじめに

戦後半世紀が過ぎようとしている今日、日本社会は激動の時代を迎えている。

経済面では急激なまでの円高に加えたバブル経済崩壊、政治面では自民党長期一党支配の終焉、自社連立政権誕生までの政界、国際面では自衛隊によるPKO活動など、ここ数年で何十年もの歴史を経験しているような気がする。

二十一世紀も間近に迫り、日本の社会構造は変わろうとしているが、どのような歴史を刻むことになるのだろうか。

日本社会の構造

わが国の高齢化率は現在約一三％程度であり、欧米諸国に比べれば低位の水準ではある。しかしながら、二〇二〇年には約二五％と四人に一人は六十五才以上の高齢者が占めることとなる。

当然のことながら、医療費、年金の問題がでる訳であり、税収入をはじめとした対応が迫られる。政府は消費税アップによる検討を進めているが、この高齢化社会をどのように対応するのか、まずまず政治の重責も大きくなる。

一方、労働人口については、二〇〇〇年にピークに達し、その後減少傾向に向かうと予想されている。日本経済を支えてきた労働力であるが、生産力の低下、消費の減は日本経済を揺るがしかねないこととなる。

また、定年延長、再雇用制度による対応も高齢化と合わせ、今後の課題となると思われるが、労働組合としてどのようなスタンスで望むのか明確にしておかなければならない。

昨今、出生率の低下が話題となっているが、高齢化、人口減少の要因となるのが出生率である。日本の出生率は現在、一・五人を割っている。このことは、晩婚化、個人の自由感などに影響しているか知れないが、出産しやすい、子育てしやすい環境を作ることでも一方では必要である。

育児休業制度、休業保障、託児所などの整備・改善も必要である。

ゆとり豊かさの実感できる社会

戦後の日本経済の発展は、国民一人ひとりが豊かになりたいとの願望を持ち、絶えまぬ努力をしてきた結果であり、物質的な豊かさを感じるようになったことは事実である。

しかしながら、欧米諸国に比べ、物価は高い、社会資本は整備されていない、余暇の活用場所がないなど、克服しなければならない課題は山積している。

「真にゆとり豊かさ」を実感できる社会を形成するには「心」の豊かさを追及していく必要がある。労働組合も休暇取得、時短などに取り組んでいるが、生活しやすい環境の整備をすることも必要である。

最近、地域との共生とかボランティアが注目を集めている。これからの社会は自分だけでなく、共に生きるということを考えていかなければならないが、ことボランティアについて考えてみると少し奥が深いように思う。つまり「心」が入っているか、ということでないかと思うのである。学校教育

にボランティアを入れるなど子供のころからの意識づけが必要なのかも知れない。

国際的調和

東西冷戦構造の終結はまた多くの民族紛争を勃発することとなったが、今国連をはじめとした新たな世界秩序の模索がされている。

その中で日本の果たす役割はますます重要となってきた。

国連安保理常任理事国入りをめぐる動きが活発になってきているが、経済大国日本としてはそれなりの貢献・役割を果たすことは当然のことである。

貿易大国として発展した日本であるが、輸入が止まればどうなるか、日本経済は数ヵ月で破綻するばかりか食料すら自給できないと想定されているのである、自国だけのことを考える時代は冷戦構造の終結と同時に終りを告げたのでなからうか。

「未来は歴史から学べ」ではないが、日本はあの太平洋戦争での教訓を知っている。「いつかききた道」を歩むことのないよう国際的感覚での対応が必要である。

日本の政治

昨年七月の衆議院選挙では三十八年間続いてきた自民党の長期一党支配が終り、細川連立政権が誕生した訳であるが、その期待も束の間、その一年後には何と五十五年体制のもと表舞台で対立を演じ続けてきた自民党と社会党が政権を担当するという、信じられない状況となった。

巷では自民政権の復活、野合政権といわれスタートした村山内閣が、何と支持率が上昇し四〇％を越えている。一国民からすれば何がなんだか分からない日本の政治である。

衆議院の選挙制度も変わり、新・新党結成など二大政党制に向けた動きが活発になっているが、どのような枠組みが確立されていくのであろうか。

前段で述べたように、ますます政治的役割が大きくなっている今、政党、政治家個人の利益でなく国民生活に軸足を置いた政治を行っていただきたいものである。

これからの労働組合

敗戦後、アメリカの指導によって作られた労働組合であったが、日本経済の発展に果たした役割は評価されて良いのでなからうか。緊張感のある労使関係は良質な労働力を最大限に発揮する絶好の機会であったと考える。

しかしながら、その労働組合も新たな局面を迎えている。

これまでの労働組合は賃金をはじめとする労働条件の改善により組合員とその家族の生活の安定を第一義として労働運動を展開してきた。そのことはこれからも不変であろう。

しかし、組織率の低下は何を物語っているのであろうか。歴史的にまぎれもなく存在してきた労働組合であるが、二十一世紀に向けてどのようなスタンスで望むのか、まさに「改革」が必要な時期にきているのでなからうか。

連合結成五年、社会的な位置付また責任も大きくなる労働組合であるからこそ既成概念に拘ること

なく常に「明日」を見つめた活動が必要である。

「保守的」といわれる労働組合、自らの組織、活動にどこまでメスを入れることができるか、組合役員への期待は大きい。

おわりに

何不自由なく生活している今日ではあるが、二十一世紀を展望すると課題は山積している。

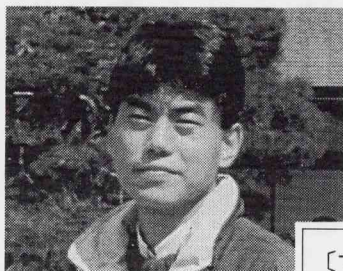
この課題を誰が克服していくのか、当然のことながら政治に頼る部分は大きくなるのであるが、やはり国民一人ひとりが認識を新たにすることではなからうか。

来たるべき二十一世紀が、豊かで平和な社会となるよう望んでいる。

十戒（私の人生観）

中部電力㈱ 人事部

加 藤 泰 孝



〔プロフィール〕

加藤 泰孝（31歳）

- 1963年 愛知県名古屋市生まれ
- 1987年 中部電力（株）入社（長野営業所
料金課配属）
- 1989年 火力センター総務部人事課
- 1991年 本店人事部安全・厚生課
現在に至る

＜家族＞ 妻（1993年に結婚）

＜趣味＞ スキューバ・ダイビング、スキー

一 「忙しい」という言葉は口にしない

中部電力に入社して最初に配属されたのは長野営業所料金課であった。配属初日に先輩から言われた言葉が今も私の心に残っている。

「ここでする仕事は、中部電力の業務の中のわずかな断片でしかない。その仕事において忙しいと感じていたら本店・支店では役に立たないよ。」

どんな時でも、常に「自分にはまだ余力がある。」と自問自答していれば直面するこの状況はたいしたことでないように思えてくる。

二 信じる者は己から

私は決して無神論者ではないし、宗教を否定するつもりもない。ただ、まず第一に信じることは、様々な行動・発言をした自分自身に対してである。

これからの人生においては、意見の違いによる対立や様々な障害に直面する機会も多くなると考えられる。そんな時、その問題に立ち向かう自分にどれだけの支援者（同調者）が得られるだろうか？
せめて自分自身ぐらいは、その応援団長でありたいと思う。

三 千里の道も一歩から

誰しもが心に抱いている事であり、人間は目標・目的がなければ決して現状より成長しない生き物である。

「有言実行」という言葉のとおり、自らノルマを広言しプレッシャーをかけることで目標に向かつて努力しそれを実現する。ただし、あまり漠然とした目標・中長期的な目標では現実的ではなく、机上の空論になりかねない。

私の場合、「今、何をしなければならぬか。」・「何をしたらほうが得策か。」といった意識を持ち、直面する事柄を日々処理することを積み重ねた結果、将来の目標（目的）が達成されるという形にしていきたい。

案外知らず知らずに、目的は達せられているかもしれない。

四 まだまだ私は平社員

今私は、三十一歳。中部電力株式会社の本店人事部安全・厚生課に勤務している。

組織上本店は、支店・事業場を統括・指導する立場にあり、時には電話の向う側にいる担当者に語気を荒げて意見することもある。

仕事を円滑にすすめていくためには、たとえ相手が自分より年上の人であっても、言わなければならない事柄が起ってくる。

そんな時、私はいつも心に思うことがある。

「今の私は、たまたま本店という組織の最上部署に在席しているにすぎず、決して私自身が相手よ

り偉い訳ではない。まして相手が年長者であれば当然のこと、人生における先輩として敬うべきである。」「下駄を履き違えないようにしよう！」

五 今世紀最大の楽道家

「どんなにつらい仕事でもどうせやるなら楽しくやろう！」

「どうせ一度の人生なら、限られた時間の中でよくよくしてても仕方がない。」

「悩む時間があるぐらいなら、そんな時間は勿体ない。どうにかなるさ何事も。」

常々、口にして自問自答を繰返す。いつ何時でもこんな気持ちで過ごしたい。

六 相手を納得させるためには数字を示す

仕事の中で、自分の考えをまとめ上げ上席者に伺いを立てることがしばしばある。

常々そんな時、上席者を納得させる一番の手法は、数字でその価値を評価する事だと思っている。

個人の意見や考え方は、十人十色で違っていて当たり前。様々な意見を言われて書類を返された時に、「自分の考え方は受け入れてもらえなかった。」と力を落とすよりも、誰が判断しても同じ評価が得られ、客観的に検証ができる数字こそ最適な説明手段であることを認識すべきである。

私の仕事の中では、その成果を数字で表す頻度はさほどないが、営業マンにとっては数字こそが生命線、数字、数字、数字、やっぱり数字は一番偉い！

七 下手な鉄砲も数打ちゃ当たる

「チャレンジ」その精神を基本として、思い立ったらまず行動を起こす。そんな時あれこれと考えていても何も解決することはできない。

自分の目で見ても、肌で感じなければ、物事の本質を理解することはできない。

その際に、一つの考え方や行動に固執しちゃうのではなく、様々な角度からあらゆる手段を講じて検証を繰り返す必要があると思う。

時間の許す限り、可能性を求めて模索していると、そのうちに的を得た答えが得られるような気がする。いろいろ試しているうちに、新たな発見が見つかるかもしれない。

八 人の視野の中に入り込む

会社の中にあつては、どんな雑用でも構わないから、とにかく用事を頼まれる人間になりたい。人から用事を頼まれると言うことは、頼みにきた人の視野の中に自分が入っているということ、少なからず関心を持たれているということだと思う。

どんな些細なことでも日頃から周りの人と関わりを持っていれば、自分一人では解決できない問題や自分の知識の範疇を越えている問題に直面した時でも、決して無駄にはならないと思う。

会社の仕事は、関係する相手が知り合ひであれば八割方その仕事は終わっているようなものである。人と人とのつながりは、ちょっとしたきっかけが基で生じるものである。将来の自分のために、い

かにして他人の視野の中に自分を存在させるか。

九 ギャンブルを通じて度胸をつける

ギャンブルといえば趣味に興じることと相俟って、競馬・麻雀・パチンコ等々、小遣い稼ぎに精を出している。ここ一番の勝負時に、いかに大胆かつ冷静にいられるかによって勝負の明暗を分けることがよくある。

「ここで敗けても命までとられる訳じゃない。所詮は遊び。」と心に念じていると、結構何とかなるものだ。人生には、時には開き直らなければ対処仕切れない状況に陥ることが多い。そんな時、いかに決断良く方針を決定することができるかは、ギャンブルで培った度胸の差に左右されると思っている。遊びから学べることは沢山ある。

十 同じ失敗は繰り返さない（失敗から何を学ぶか。）

過去を振り返り後悔することはない。過去を振り返るときは、自分の行動を冷静に分析し、反省すべき点をしっかりと自覚する必要がある。

一度や二度の失敗は誰にでもあるし、失敗をしない人はこの世に存在しない。失敗をしても放置せず、その失敗を糧にして今後の活力にしている人が大成するのではないだろうか。

「反省だけなら猿でもできる。」のフレーズのとおり、反省することから何かを学んでこそ人間としての価値がある。

“Winterreise”

トヨタ自動車㈱ 人事部

荻野 勝彦

〔プロフィール〕

荻野 勝彦（32歳）

- 1962年 長野県生まれ。
- 1985年 トヨタ自動車㈱入社。高岡工場工務部で原価管理・生産性向上活動に従事。'89年人事部に異動し労務を担当。

〈家族〉 なし

〈趣味〉 本文中に記載

〈モットー〉「在野精神」「溶けるほど燃えよ。
凍るほど醒めよ。」

(イントロダクション)

書き始めの勢いをつけるために、まず私の好きなことを列挙してみる。

- ・週末の夜に、寿司屋のカウンターで競馬新聞を読むこと。

レースも楽しいが、前日の検討であれこれ思いを巡らすのはもっと楽しい。

故寺山修司は「人生はたかが一レースの競馬だ」「競馬ファンは馬券を買わない。財布の底をはたいて『自分』を買っているのだ」と喝破したというが、私にとって競馬はまさにそのとおりのものである。競馬は本当に面白い。

- ・喫茶店やファーストフードで読書にふけること。

雰囲気の出た喫茶店もいいものだが、ファーストフードは粘れるのがあるがたい。

それだけでなく、人生のあらゆる場面で、私は本を手放せない。

毎朝七時前に会社に来て朝刊五紙を読むのもこのうえない楽しみである。夜更けまで痛飲した翌朝も、朝刊が待っていると思えば早起きは平気だ。

- ・酒を飲むこと。まことに酒は人生最良の友である。

一人でぼんやり飲むのもいいし、気のおけない友人と飲むのもいい。忘年会などでワイワイやるのも悪くはない（脱線がなければ）。気候のいい時期、天気の良い日に公園で飲む酒も格別である

（他人からはアル中にしか見えないが）。

- ・ラーメンのおいしい店を探すこと。

車を運転していてラーメン屋を発見するとにかくようすをうかがってみる。

客が多くて回転の早い店（店のつくりもそういう構造になっていることが多い）なら見込みは十分である。あとは好みにあうかどうかだ。

・列車の窓から風景をながめること。

各駅停車は風情があっていいものだが、なかなかそうはのんびりもできない。

出張の往復の新幹線であっても文句はない。

・日曜日の昼の、将棋や囲碁のテレビ観戦。

ど真ん中の投球をボールと言われたとか、ペナルティキックの笛ひとつで三点とかいうことがないのがいい。プロ棋士が秒読みに迫われて必死で考える姿はまさにスポーツである。中国や韓国では囲碁をスポーツとして振興しており、日本より強いくらいだと聞く。もちろん、野球観戦も楽しいけれど。

・美術館や博物館をのんびり見物すること。

アウトドアの活動、特にスポーツが苦手な私は、休日には美術館やコンサートに向いて過ごすことが多い。

・音楽。聞くのもやるのも楽しい。下手クソな作曲にふけるのも面白い。

ジャンルは問わないが、クラシック音楽が特に好きだ。聞き流すのもいいし、コンサートに出掛けて構えて聞くのもいい。仕事の仕事だけに殺伐とした気分になることが多いのだが、そんな時に心にうるおいを与えてくれるのは音楽である。

やつと音楽の話にたどりついた。この文の表題にした“Winterreise”(冬の旅)は、シューベルトの有名な歌曲集であり、私のいちばん好きな曲のひとつである。この曲をめぐって、いろいろ思うことをいくつか書いてみたい。あまり脈絡はないのでごかんべん願いたい。

(スポーツ組織と合唱組織)

私は、「声変わり」して以来、学生時代を通じて合唱に打ち込んできた。それだけに、どんな楽器の音よりも人間の声が好きである。

アマチュア合唱の楽しさのひとつは、上手下手にかかわらず、誰もが同じ練習に一緒に参加できることにあると思っている。スポーツ(特にチームの人数が決まっている球技)の練習は、どうしても技術の優れた人たち中心で、ほかの人たちは「球拾い」的な練習になりがちである。合唱の場合は、全員がレギュラーであることが多いし、そうでなくても練習においてはレギュラーと補欠の差はほとんどない。

また、コンクールなどがあることはあるが、基本的には勝ち負けという概念がない。

したがって、スポーツにありがちな「勝つためには手段を選ばない」という発想がない。企業活動においては、スポーツ的な発想が好ましいだろうし、今後も多分そうだろう。職場組織も、采配をふるう人Ⅱ管理職、活躍する人Ⅱ総合職、お手伝いする人Ⅱ一般職という役割分担ができているし、業務遂行や目標達成のためには「手段を選ばない」ことも多いように思える。企業がスポーツ選手を好んで採用するのも理解できる。

しかし私は、企業に「合唱的」なるものを取り入れていくことができないだろうか、と思うのである。業績拡大、シェア獲得競争、そういったものが求心力になるうちはいい。それぞれがしゃにむにがんばればいいのである。

ところが、いつまでもそうではいられない。今時の企業では、「創造性」や「独創性」が必要だと言われているし、企業に対して、「社会貢献」とか「国際協調」とかいった、業績拡大に較べるとどうもわかりにくいものが求められたりもする。一見すると、個人のスタンドプレーがより脚光をあびる時代に思えるが、スタンドプレーだけでは企業活動が成り立たないことも事実である。

こうした中で、いかにして組織を活性化し、構成員がそれぞれ能力を伸ばし、生産性を向上するモチベーションを与えていくか。「合唱的」な発想にヒントがないだろうか。

各構成員の役割分担を流動化させ、それぞれのレベルアップが全体のレベルアップにつながるような組織、それぞれが「働き方」にこだわりを持ち、手段を選んで目標達成を追求する風土、こうしたことをもっと考えてみてもいいのではないか。

合唱団においては、指揮者が唯一のリーダーであり、そのもとでメンバーはすべて並列である。古い昔からの「フラット組織」がここにある。

(希望)

「冬の旅」の青年は、失恋の痛手に耐えかねて町を出て、真冬の放浪に旅立つ。失意、絶望、カヲ元氣、虚無感、夢想、錯乱にさいなまれながらも、偶然出会った年老いた辻音楽師（音楽を演奏して

施しを求める物乞い」に共感し、ともに旅を続けることを決意する。結局は投身自殺を選んだ「水車屋の娘」の青年とは異なる結末である。

「希望は、人間が最後にかかる病気である」ということばがある。結局のところ人間は希望に生きるのであるし、希望なしに生きられるものでもあるまい。「冬の旅」の青年も挫折と失意に満ちた放浪の末になんらかの希望を見たのだろうか？人類がパンドラの箱を開けてしまったときに、ありとあらゆる災厄の最後に「希望」が出てきたように。

（少子化、エイズ、幸福な生き方）

仕事の関係で、ある企業経営者の方と親しくお話をさせていただく機会があった。

社会的地位においても人生経験においても、私ごとときよりはるかに格上の方であるが、酒のはいった気安さもあり、当方の未熟な書生談義にも辛抱強く我慢していただけた。

その彼が今非常に危機感を持っているのが「少子化」と「エイズ」の問題だという。どちらの問題も、「今手を打たなければ大変なことになる」という。

私は、少子化問題については、持論として、社会的分業の問題であるという構造的な考え方を持っている。家庭的関係より社会的関係に生きがいを見いだそうとする人たち（女性を念頭においているが理論的には男女を問わない）は、家事・育児は社会的分業に任せる（ひらたく言えばカネを払って家事や育児を他人にやってもらう）しかないのであり、それを可能とするインフラの整備（家事・育児代行ビジネスの形成）と、それを許容する社会的風土の形成が必要であると考えている。

こうした私の意見を、彼は笑いながら聞いていたが、「生後一定の期間を通じて特定の人間と一对一の接触を持たなかった人は、精神的な社会適応性が著しく低くなる」という心理学者の研究結果をひいて私の意見を否定し、こう語った。意を正しく伝えられるかどうか自信がないが、彼の意見を紹介したい。

「少子化の問題とエイズの問題は、実は根元でつながっている。子を生み、育むという人間のもっとも基本的な営みにかかわるものであり、根本的には、男性・女性を問わず、『どのように生きるのが人間として幸せか』ということに尽きるのである。

生きとし生けるものはすべて、その種の存続と繁栄のために生きるものであり、あとに来る世代の幸福を思わない人生は不幸であるはずである。家庭の中で子を育てることが、そうしないことより幸福でないというのは、どこが間違っている。われわれは社会的な成功を幸福であると考えすぎて、家庭を築き子を育てることの幸福を見失っている。この幸福を本当に幸福と感じられるようにしなければならない。

こういう時代にエイズが人類の脅威となっていることは、非常に象徴的である。

エイズは非常に伝染力の弱い病気だが、性交渉を通じて伝染し、さらに母子感染するという所に恐ろしさがある。当然のことながら男女間の交渉なくしては子は生まれず、種の存続も繁栄もない。性交渉をしなければエイズで死ぬことはないが、子も生まれないから結局人間という種は滅びる。

『一人がひとりを生涯愛する』ことが、人間として幸福な生き方であるということをもう一度思い出さなければならない。これこそが、家庭がかけがえのない大切なものとなる大前提であり、家庭を

築き子を育てることの幸福の大前提にもなっているのである。決して、コンドームをつければエイズにかからないといった問題ではない」

人によりいろいろな考え方があろうが、私は彼のこの意見に非常に感銘を受けたのである。これまで好き放題にやってきて、いまさらという感もあるが、とにかく私は今大いに反省している。

「冬の旅」の若者は、失恋の痛手から放浪の旅に出た。それは今時はやらない情熱であろうし、かびの生えた倫理観であるかも知れない。しかし、そこにはなにかしら人間として大切なものがあるような気がするし、だからこそ時代を越えて人の心に訴える。

（忘れている何か）

私の仕事は、かなり殺伐としており、ストレスやプレッシャーも比較的強いいため、どうしても精神的にすさんでくる。家庭を持たない私にとって、こうした時のいちばんの救いは音楽である。

「冬の旅」を聞くたびに（時には小声で歌ってみるときに）、なにかしら「忘れていた大切なもの」を思い出すような気がする。それは何なのか、うまく表現はできないが、とてもセンチティブでナイーブな何か、忘れていたほうが、たぶん社会の中で生きていくには都合のいいような何か、である。人それぞれ、人生に光と影があるだろう。人事は、多かれ少なかれ、人生の「影」にふれる仕事である。私は、人事に携わるものとして、その「忘れていた何か」を、時には思い出してみなければいけないような、そうしないと「ふだん忘れていた」ということすら忘れてしまうような、そんな感じを持っている。

だから私は、時々「冬の旅」を聞きかえしている。

「その他のおすすめの曲」お暇とご関心のある向きはぜひどうぞ。忘れている何かを
思い出せるかも知れませんよ。

モーツァルト／レクイエム、ピアノ協奏曲第二十番、クラリネット五重奏曲ほか
ベートーヴェン／「アデライーデ」、ピアノ協奏曲第三番、莊嚴ミサ曲ほか
シューベルト／歌曲集「美しい水車屋の娘」、同「白鳥の歌」、

ピアノソナタD九百六十、交響曲第八番、弦楽五重奏曲、ほか多数
ベルリオーズ／幻想交響曲

シューマン／「リーダークライス作品三十九」、「同作品二十四」ほか多数
ブラームス／ヴァイオリンソナタ第三番ほか

ショパン／ピアノソナタ第二番、バラード第一番、スケルツォ第二番ほか
ドヴォルザーク／ピアノ五重奏曲

マラー／「さすらう若人の歌」

フォーレ／パヴァーヌ、レクイエム、「漁師の歌」「夢のあとに」ほか

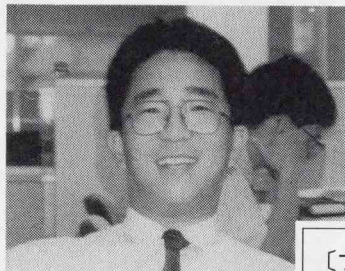
グリーグ／「最後の春」

シベリウス／交響曲第二番

人との出会い

トヨタ自動車労働組合

加藤 昭夫



〔プロフィール〕

加藤 昭夫（34歳）

- 1994年 12月27日生まれ
 - 1983年 4月1日 トヨタ自動車㈱入社
- 現在 トヨタ自動車労働組合産対
局長

とりとめもない話になりそうなので、最初にお断りしておきます。私は合併直後のトヨタ自動車に入社しましたが別に車が好きなわけでもなく、通っている車を見てもどれがカローラでどれがクラウンか分かる訳でもなく、後ろのネームを見て「そうか、これがマークⅡか。」と思うだけで直ぐに忘れてしまいます。ましてや、これがトヨタのクラウン、これが日産のスカイラインなど見当もつきません。早い話がトヨタで何を（車を作っているぐらいは知っていました）作っているか知りませんでしたし、知ろうともしませんでした。

こんなこと書いていいのか分かりませんが、この感覚は今でも同じです。（勿論、今ではトヨタ自動車は何を作っているか知っていますし、形で車名もほとんど分かりますが）しかし、トヨタ自動車に入社して良かったなあとと思うことは、今回の題材でもある『人との出会い』です。さすが七万人以上の会社だと思えますが、そこかしこにキラッと光る人がいます。一方、反面教師となっていただけの方もそこかしこにみえる訳ですが、いいかげんだった私を少なくとも今の姿まで矯正してくれたのは、そこかしこの光る人だったことは疑いません。

本当に運がいいと思うのですが、私は上司・仕事に恵まれてこれまで会社生活を送ることが出来ました。特に上司については、恵まれました。これは私の自説ですが、部下なんて者は上司によっていくらでも左右されますし、どうにでも転がります。「子は親の背を見て育つ」が真であれば、「部下は上司の背を見て育つ」もまた真なりです。私の最初の仕事が人事ということもあって、色々な職場のいわゆる上司という方と接することができました。部下のために涙を流す上司も見てきましたし、とても部下のことを考えているとは思えない方とも会ってきました。後者の部下に成られた方にはお

悔やみ申し上げるほかないわけですが、私は偶然（だと思いますが）、前者に近い、私或いは私の回りの者のために少なくとも怒りをあらわにしてくれる上司たちであったと思っています。

最初の人事では「仕事の厳しき」「人と接することの大切さ」を学びましたし、次の生産管理部では「仕事のおもしろさ」「人より常に一歩前向きな指向」「チームワークの大切さと共に仕事をやる楽しさ」を学びました。生産管理部の「人より常に一歩前向きな指向」はもちろん上司の背を見て学んだわけですが、「51%の原則」（51%の真理？原理？だったかな？）といって酒を飲みながら当人の意見を話してもらいました。

「いいか加藤、前向きな仕事は成功しやすい。後ろ向きに仕事をしてると成功しにくい。分かるな。」
「はい？」

「人は平均すると51%の前向きさで仕事をしとる。これでは50%の成功率だ。加藤お前はいつも51%の前向きさで仕事をせい。初めは成功率は似たようなものだが、繰り返し繰り返し51%で続けていけば成功率はどんどん上がるし、人以上の仕事ができる。ウィ。」

「なるほど。ゲップ。」

とお互いグデングデンになりながら教えてもらった覚えがあります。他にも色々な原理？を教えてもらった訳ですが、こういった時は、仕事は楽し、飲んで楽し、遊んで楽しです。労働組合専従となつた今では問題発言かもしれませんが、上司と訳の分からない議論をしながら何度も次の日まで仕事をしましたし、徹夜もやりました。でもそれも楽しかったし、できあがって評価されたときのギャツといつて飛び上がりたくなるような嬉しさは何事にも代えがたいものです。これは色々な上司という

“人”、同僚という “人”、後輩・部下という “人” との出会いによって生まれる幸福だと思います。

また、先にも書いたように私は仕事にも恵まれました。ご存じのとおり人事ではいろんな部署、私にとって何をしているのか分からない部署も含めて色々な人事折衝をしますので、色々な人と話ができただけでなく、ある程度会社の状況が見渡せましたし、生産管理部新車進行管理室というところは、設計から生準、製造から販売に至るまで文字通り新車の進行を管理する部署ですので、設計から営業までスルーで（浅く広くではありますが）勉強できたと同時に、やはり多くの部署の方とお付き合いさせていただきました。特に生産管理部時代には、丁度私の在籍中にTANUKIというイギリスにおけるカリリーナⅡ（日本名コロナ）製造工場が立ち上がり、その生産準備段階に二度ほど計六カ月にわたり駐在させていただき、海外での見聞も深めることができました。きっとこれまでの慣例どおり最初のページに私のプロフィールとともに写真を載せていただけたと思いますので、その写真を見て分かりますように私は英語がほとんど話せません。

一度隣に座っているイギリス女性の顔色が悪かった日がありましたので、見えない聞けない言えない（見ることは出来ますか）三重苦、ヘレンケラーの私は奮発して慰めてやろうと思い、勇気を奮って“Your face is bad.”と言って、青かった顔を赤くしてあげたこともあります。そうはいっても六カ月もいましたので何とか飯くらいは一人で食べれるようになりましたが、やはりイギリス人との会話、特に、会議はもう二度と出たくありません。生産管理部というところは「お前これやれ。」と “言っ”て “なんぼのところですか、この苦しさをお察しください。しかし、ここでも何の役にも立ちませんでしたがイギリス人という『人との出会い』があったことも事実です。

余談になりますがいギリスはやはり日本と違います。風景も人も文化も。風景で言うならば私はロンドンなどの都会は東京にいるようであまり感動を覚えませんでした。一度一人で湖水地方（有名なネス湖があるところ、ネス湖は遠くへ行けませんでした）や「嵐が丘」の舞台になった何とかないうところや、ピーターラビットの故郷とかいったところに行ってきました。素晴しいところでしたので、皆さんにも行く機会があれば寄られることをお勧めしますが、ある程度感動するなかで思ったことは、これが一人ではなくて嫁さんや子供たちと一緒にだったらなあ、と言うことでした。先ほど書いたように私は横文字恐怖症ですので仕事では（例えば、素晴らしい上司に誘われてもお断りせざるを得ない）絶対に二度と行きたくないのですが一度嫁さんを連れて行って「すごいだろう。」と言ってやるのが私の夢です。余談でした。

色々とりとめのないことを書いてきましたが、トヨタ自動車に入社して色々な出会いがあって、色々な人から勉強させていただいて今の私がいいます。これが本当に良かったのか悪かったのか、今の私を見ていただいてご賢察いただければ幸いです。私自身では幸せな出会いが多く、本当に51%以上の方とお付き合いさせていただいていると思います。今、労働組合に来て、今までのお付き合いが役に立っていることはもちろんですが、新たな出会いがありましたし、色々な職場、ひいては色々な会社の組合幹部の皆さんにも会うことが出来る、やはり恵まれた職場です。産政塾という場を通して、この本に載っているような色々な職種の方とお付き合いさせていただくことができました。新しい世界でのお付き合いで戸惑うことも多いですが是非一生を通じてお付き合いいただける方を今後も捜していきたいと思いますし、その中で生き甲斐のようなものを見つけれたらと思っています。

最近私は釣りに凝っています。これも素晴らしい方々のお誘いを受けて始めたのですが、くそ熱い中でもくそ寒いなかでも何も考えずに釣り糸を垂れる。釣れないときは飲み騒ぐ。いいものですよ、皆さんも一緒にやりませんか。ところで、魚のなかには、いつも一所にいて、餌が来たら食べる魚と、いつも餌を求めて大海を泳ぎ回る魚がいます。私は何にしても後者の魚になることを切望しています。また、先程私のであった素晴らしい上司のことを書いてきましたが、最近私も少ないながら部下を持つ身になってきました。是非私は部下のことを常に考える、部下は私の背を見て育つを地でいってみたいものです。

サラリーマンの生きがい探し

日本特殊陶業㈱ 経理部

磯部 謙二



〔プロフィール〕

磯部 謙二 (31歳)

- 1963年 愛知県名古屋市生まれ
- 1986年 日本特殊陶業㈱入社 経理部配属
- 〈家族〉 妻
- 〈趣味〉 スキー、旅行 (生きている間に世界中を旅してみたい)
- 〈モットー〉 やるときはやる、遊ぶときは遊ぶ

産政塾との出会い

ある日突然、私の上司に後ろから肩をたたかれ、「面白い研修があるぞ、いい勉強にもなるから一度参加してみなさい。」といわれ、特に断る理由もないので「はい。」と答えた。研修なんてものは半分遊びみたいなものだから会社を抜け出して息抜きするのに丁度いいやと思っていると、後でパンフレットを渡され、そこには『来たれ、意欲満々の若者たちノ、時代を担う若者のロマンと情熱を育む現代の道場開設ノ』と書いてあるではありませんか。道場に入る気など全くなかった私は、何と恐ろしい研修に参加するはめになってしまったのだらうという不安と簡単に返事をしてしまったことに後悔していました。

更に当社からこの産政塾に参加するのは私が初めてで、どの様な内容か聞く先輩もいないうえ、産政塾のメンバーが、私が大学時代に「こんなところに就職出来ればなあ。」と希望を抱いていた一流企業ばかりからの参加であり、同年代とはいえ私の様な人間がこういう中に入ってやっていけるのか心配でした。

しかしこの不安は、第一回会合後の親睦会の席で消えました。酒の力を借りて緊張感をほぐし、初対面の人でも他愛のない話に花が咲かせられる雰囲気を提供してくれた為に、意外とすんなり溶け込むことが出来ました。今までの不安は吹き飛び、むしろこの産政塾を機に何かを得よう、また他企業の優秀な人から貴重な情報を得ようと思ったのです。

退屈なサラリーマン生活

ここで少し今の私の生活を振り返ってみます。私は社会人になって九年目、まだ三十代になったばかりだというのに目的のない、つまらない人生を送っている様に思います。月曜日から金曜日までは毎朝六時に起きて会社に行き、そこそこのルーチンワークをこなし、人並みの残業をして毎晩八時か九時に帰宅する。帰宅した後も暇をもて余し、ビールでも飲みながらテレビを見て時間が来れば寝るかといって休みの日は外に出掛けるわけでもなし、読書の趣味があるわけでもなし、あえてする事といえは女房と近くのスーパーへ一週間分の食料を買いだしに行くぐらいなものです。

しかし、私が十代二十代の頃からこの様な生活をしていたわけではありません。大学時代はスキークラブに熱中し、朝から晩まで、夏冬かまわずスキーのことしか頭になく、大学の授業は欠席することが多く、その罰があたり単位不足の為、追試で何とか卒業させてもらったという具合です。

社会人になってからもスキーが頭から離れず、夏場は帰宅後や休日を利用してトレーニングに励み、冬になると金曜日の晩には必ず山へ向かっていました。今考えてみると、この時代は自分にとって毎日が非常に充実していた様に思います。その時代にはその時代なりの悩みや苦しみもあったでしょうが、スキーというひとつの趣味・目的があったが為に休日はもちろん楽しいのですが、仕事の上でも次の週末迄頑張って働こうという『張り』みたいなものがあった様に思います。

それが今では退屈な生活に変わってしまった。人生八十の時代といわれる中で、まだその半分も生きていない私が、今からこの様な生活を送っているのはこの先どうなるのだろうかと思えるだけで

心配です。

忘れていたもの

産政塾はそういう私の人生を少しでも変えてくれるきっかけになったことは間違いない様です。講師を招いての座談会では、その講師の方々が必ずしも著名な人ばかりでなかったことがむしろ私にとって身近に感じることが出来たと思います。

講師の方々が著名でないと行ってしまったことは、私自身が知らないものであって、その業界では有名であり大変失礼な言い方をしてしまいました。が、全七回の会合の中である特定の業種にとらわれず様々な生き方をしている人に巡り合えた事は私自身の視野を広げることが出来、普段の会社生活では決して体験できないことでした。

同年代でありながら日本の政治を変えてやろうと希望を抱いている人、サラリーマンを辞めて草根の海外協力活動を行っている人、また反対にサラリーマンを続けながら余暇を有効に利用し自分の趣味に情熱を燃やしている人、その他全ての人が私と違った道を歩き、目に輝きを持って、人生を楽しんでいる様子を肌で感じ取ることが出来ました。

私は日本の政治を変えてやろうなんて大それたことは考えていませんし、会社を辞めて収入源がなくなつてまでボランティア活動をする勇氣ありませんが、同じサラリーマンとして働きながらシャーロックアンであり本も出版している河村さんと鮎釣り名人の吉橋さんに会った時、私に足りなかったものの、欠けていたものの、忘れていたものを教えてくれた様な気がしました。

河村さんは、三菱商事の取締役というポストにしながら週末を利用して本を出版し、日本エッセイストクラブ賞を受賞した人です。仕事は誰にも後指をさせられないように十二分にやりとげた上でのプラスαの部分が趣味であり、週末を利用して年間五百時間の余暇を創り出し、その趣味である本を書く時間にあてたそうです。これからのサラリーマンは仕事上の能力を磨くとともに、自分で創り出した余暇を利用して何かの専門家になるべきであると言っています。

一方、吉橋さんはトヨタ自動車の工長を務めながら鮎釣りの解禁になると毎週末必ず川へ出掛けるそうです。周りの景色と鮎釣りの魅力にとりつかれてしまった様ですが、全日本鮎釣り選手権大会にも出場するほどの腕前なのです。この大会に出場する人は、地元の毎日鮎釣りの出来る環境に育った人が大半の中で、サラリーマンが週末に腕を磨き、そして出場することは相当大変なことだそうです。この二人に共通することは、ともに働きながら趣味・生きがいを持ち、それを今までも、そしてこれから情熱を燃やし続けていけることです。

三十代にすべきこと

この二人の情熱、これこそが私の求めているサラリーマンの生きがいであると感じました。そして私もこれを機に自分の生きがいを見つけなければならぬ。私が忘れかけていたもの、十代二十代の頃もっていた様な何か情熱を燃やすことのできるもの、それは他人にとってつまらないものでもいい、私にとって一生続けられる趣味、サラリーマンとして仕事の励みになるもの、であればよいのです。

私はその趣味で賞を貰おうとか、名人になってやろうなどとは思っていません。私もサラリーマンですので仕事は家族を養っていく為の、又、人並みの生活をしていく為の大切な収入源ですので、自分なりに一生懸命働いた上で余暇を有効に使っていければと思います。

河村さんは年間五百時間の余暇を創り出したと言いましたが、これは土日それぞれ五時間づつ、年間五十週で計算した数字だそうですが、平日の帰宅後の時間を含めると更に多くの余暇を持つことも可能であり、仮に私が八十歳迄生きるとして残り五十年を余暇時間に換算すると気が遠くなる様な時間となります。

そう考えると一生の内で仕事をする時間がいかに少ないか、そしてこの莫大な余暇時間を無駄にしているはいけないと感じるのです。仕事ももちろん大切ですが、あまり仕事人間になりすぎて趣味を持たず、会社にべったりとくっついていると定年後の残り二十年の人生が気の抜けたものとなってしまってもいけません。充実した余暇を過ごすこと、例えば月曜日の朝は特に会社へ行くのが苦痛ですが、次の週末の楽しみの為に「また一週間頑張って働こう！」なんて仕事の励みになる様な趣味、六十歳の定年後も残り二十年の人生を楽しむことが出来るような趣味を今から探したいと思っています。

産政塾の最後のテーマとして『三十代にすべきこと』というのがありましたが、このテーマの答えが私のこれからの生きがい探しになります。仮に十年後に産政塾の同窓会があって、その席で三十代にこんな良い趣味を見つけたと皆さんに自慢出来ることを目標にして……。

これから私の生きがい探しの始まりです。

最後に、産政塾のメンバーの皆さん及び事務局の方々、ご苦勞様でした。異業種の方々と知り合うことが出来たことは私にとって大きな財産となりました。これからの皆さんの各方面でのご活躍をお祈りするとともに、せっかく得た財産を生かす為、これで終わりにすることなく末永い異業種交流を続けようではありませんか。

素晴らしい人生

㈱東海銀行 本店営業部

二 木 芳 樹



〔プロフィール〕

二木 芳樹 (34歳)

- 1960年 長野県生まれ
 - 1984年 ㈱東海銀行入行
碧南、笠寺、東支店各勤務を経て
本店営業部第二部営業第五課現職
 - 1993年
- 〈家族〉 妻、長女 (小学校1年生)
- 〈趣味〉 日曜大工に挑戦
- 〈モットー〉 人間万事 塞翁が馬

「余暇を有意義に過ごすために」

わたしが銀行に入行した頃（昭和五十九年）から今日までに、時短や余暇の拡大という世の中の流れもあり、大幅に自分の時間（家族の時間）が増えた。しかし、いざその実感に浸ることのできる今、その時間を何に使えばいいのかわからない事がよくある。すなわち余暇を有意義に過ごす趣味がないことに気が付いたのである。

わたしが入行する前年に、銀行は月一回週休二日制が実施され、銀行の土曜日閉店が初めて社会的に認められた。そして昭和六十一年には、第三土曜日も休日となり平成元年に念願の完全週休二日制が実現した。わたしは丁度こんな時期に十年間銀行で働き余暇の拡大を身を持って経験してきた。

そんなある日、自分が何もすることもなく情けなく感じた事があった。土日が休みになり、また三連休も珍しくなくなったにもかかわらずやっていることといえば、たまにゴルフの練習にいたり、買い物、テレビ、ビデオ、ゲーム、読書、音楽鑑賞、家でゴロゴロと言った事だけである。

それに対して我が妻は、わたしが何もすることがなく苛々している時、ツールペインティングという趣味を持ち自分の時間を有意義につかっていた。これは木を買ってきてヤスリを掛け専用のペイントを塗ってそこに丁寧に絵を描いてゆくものである。実に楽しそうに時間の過ぎる事も忘れ取り組んでいる。

去年、わたしはこの状態を何とか打開したく、思い切ってパソコンを買ってみた。モデムも揃えパソコン通信も可能にした。しかし、パソコン通信は長続きせず……

またギターを持ち出してきてブルースを弾いてみようとしたことも……

なかなか自分に合い長続きするものがなく、そのイライラは以前にも増して大きくなった。

できれば老後まで続けられるような趣味が良い。わたしの今は亡き祖父は、警察に勤めながら短歌を詠み、老後は歌集の編集まで行うようになった。そして自分の歌集を出版するまでと成ったのである。

このように成るに越したことはないが、せめて長続きする趣味を持ちたい。

そのために今は幅広くジャンルに捕らわれることなく興味をもった事柄に対しては、積極的に取り敢えず手を出し、そしていつかは私にも時間が足りなく感じるような趣味がみつかると思っている。

「生き方」

わたしは高校時代、天文に興味を持ち天体望遠鏡を買ってもらい月や惑星や恒星を観察したり写真にとったりしていた。そんな事もあり会社の帰りなどにときどき澄みきった空をじっと見つめ続けることがある。

暫く見つめていると次第に頭の中は宇宙に吸い込まれていくように広がり地球や自分自身がどんどん小さく成って行く。地球まで数千光年かけて光が届く距離を考えただけで気が遠くなる。そしてその向こうにも果てしなく宇宙は広がっているからだ。そんな時自分の存在の小ささを再認識し、且つ自分の回りの社会も小さい事に気がつく。

すなわち、自分が今直面している悩みや不安は、宇宙規模から見れば本当に些細な事で何時までく

よくよしても仕様がなものと納得するのである。

すると、今まで自分の頭の中でもややもやしていた悩み消えていってしまふ。そして何ごとに対して
も精一杯取組んでみようという気持ちと勇気が沸いてくる。

私は後悔したことは幾らでもあるし、これからも数多く後悔する場面に直面すると思うがそこま
でのプロセスで自分が精一杯行つた結果であればそれはそれでいいと思う。

従つてどんな事でもとにかくやってみる。そして精一杯努力する。しない事のほうが後悔するから
だ。

今、自分の人生を振り返ると概ね後悔はない。自分の決断で岐路を選択し、そしてその選択に対し
て精一杯やってきた結果が現在である。

わたしは今年三十四才になり平均寿命からすればほぼ人生の中間地点にいる。これからの三十代四
十代の生き方が当然老後の自分を作り上げていく。やりたいと思うことに積極的に取り組みそして自
分の一生涯の中で一番充実した時期にしたい。

「あそび」

車のハンドルやブレーキには、必ず「あそび」がある。ハンドルを切つた時前輪が曲がらない部分
が遊びだ。「あそび」が大きすぎたり小さすぎると真っ直ぐに走ったりカーブをスムーズに曲がる事
ができない。普段何とも思わないが「あそび」が重要な役割を果たしている。

仕事や人生にも「あそび」が必要だ。何事にも「あそび」の部分をもたないと、すぐ壁にぶつかる

それは真面目でないと言う事ではない。例えば、仕事で顧客と条件交渉などをするとき、「あそび」のない場合は自分の側の条件をただ一方的に先方にぶつける。相手から見ると硬直的であり、まとまる話しもまとまらない場合が多い。

わたしは、この「あそび」が人それぞれ大きさが違い、同じ人でも事柄によってその大きさが違うと思う。

わたしたちが生きてゆく為に何時もハンドルを握り障害物を避けるたり曲がったりしているが自分の「遊び」を認識する必要があるのではないだろうか。

「作用反作用の法則」

わたしが二か店前の支店に勤務していたとき担当したある会社の社是は、ニュートン力学の第二法則…運動方程式 $F=ma$ であった。

この会社は中部地区の中堅企業でありながら全国から日本を代表する新日鉄、日立、ホンダといった企業が見学に来ていた。

その理由は独創的あるいはユニークともいえる企業経営を行い且つその実績を上げていたからである。そのユニークな経営理念とは先程あげた社是 $F=ma$ に集約できるものであり、それは人間関係を含めてすべてのことに当てはまるというもの。例えば人間関係に当てはめると人間も物であるから力を加えようと動く。動くということを成長することと考えると人間も車も力を加え続けないと連続して動かない。車の場合はアクセルを踏む事で、人間の場合はアクセル努力を続けないと成長し続けな

い。

このような考え方をもとに「給与は自分たちで決める。」「部長、課長、係長といった職制がない。」「担当部門は自分で決める。」といったユニークな経営を実際に真の当りにした。

わたしがこの会社を担当していた間に経理の責任者（普通の会社では経理担当役員以上）から聞いた作用反作用の法則の話はいま一番印象に残っている。

例えば取引先に対して相手のためにAだけ仕事をしてあげると相手からAに相当する分が自分に返ってくる。すなわち作用反作用の法則そのまま自分から相手に力を掛けた分だけ戻ってくるというのだ。だから会社が社会に対して貢献する努力を続ければ会社は儲かるのだ。儲けよう儲けようと考え過ぎてリスクの大きいことや反社会的なことをすることはしないのだ。

この話を聞いてこれはこれからの自分の生き方に大変参考になる話だと感じた。仕事や家庭においても、自分が得たいと思うときはまず自分から相手のためになることをしてあげることである。

君が生まれた時

勲中部産政研

佐 宗 正 典



〔プロフィール〕

佐宗 正典（32歳）

- 1962年 愛知県岡崎生まれ
- 1986年 アイシン精機㈱ 入社
工場で生産管理を担当
- 1992年 全トヨタ労連常任執行委員 兼
勲中部産政研主任研究員
現在に至る

〈家族〉 妻（並香） 長女（若奈）

〈目標〉 来シーズンこそは鮎100匹

一九九四年、十月十一日火曜日、午前九時六分。

君が自分の肺で初めて空気を吸った瞬間だ。

分娩室から君の呼ぶ声が聞こえる。

「母さーん、父さーん、生まれたよ。これからお世話をかけますがよろしくお願いします。」

「こちらこそ」である。二週間もお母さんのお腹に長居をして。

お医者さんからも「もう限界、十一日には入院してもらいます。八時には病院に来てください。」と宣告されていたのだ。

と言う声が聞こえたかどうかは定かではないが、入院当日の午前0時頃から陣痛が始まり、五時になって五分間隔になり、それで病院に駆け込んだということである。

母さんを病院に送って行ったのは、かく言う父さんではなくて母さんの父さんだったんだ。

言い訳をするわけではないけれど、父さんも七日の金曜日には会社を休んで君がいつ出てきてもいいように四日連休にして準備を整えて待っていたんだよ。

君は多分父さんに似たんだよね。

のんびり屋で、甘えん坊で、人の言うことを気にしないタイプ。

「予定は予定であって決定じゃない。誰が九月二十六日に出てこなければいけない法律をつくったんだ。」なんてね。

そりゃそうだ。母さんのお腹の中はあったかいし、静かだし（グーグーうるさかったかも？）、居心地はいいし、何よりも安心感があったよね。出てきたくなる気持ちはいくわかる。何しろ十カ月余りも過ごしてきた場所を急に立ち退けといわれても困るよね。それで心の準備に二週間必要だったんだ。

でも、偉かった。最後にはちゃんと帳尻を合わせて、自分から出たいって意思表示をしたんだから。本当、最後の最後、時間切れまであと八時間てところ。

君が母さんのお腹から「出たいよ。」と言いはじめた頃、なぜか父さんも、二時くらいまで寝つけなかったよ。

十一時には明日の仕事に備えて布団に入ったけれども、なかなか寝つけなかったんだ。

いつもだったら、布団にはいって、ほんの一分もあれば、もうすやすや夢の中ってところ。

本当だよ。母さんに聞いてみるといい。だからいつも母さん怒るんだ。「たまには、私の寝顔をみてよ。」ってね。

だから、一時すぎに起きてきて、とっておきの JACK DANIEL'S の黒を持ってきて「ぐいっ。」て飲んだんだ。

父さん酒、好きだから。

そうして何とか眠りについたんだ。

後から聞いてみると、その時母さんは七分間隔の陣痛で苦しんでいたんだね。

「母さんも人が悪いよ。電話くらいかければいいのに。」

と思う気持ちが半分。

「母さんえらい。父さんは明日会社だからと気づかってくれたんだ。」
と思う気持ちが半分。

母さんは、どちらかというと自分で背負いこむタイプだから、きっと後者だな。こういう母さんの
フォーローは君にもお願いしておきます。

陣痛が五分間隔になるまで、母さんは「あと三十分、あと十分。」って時計を見ながら頑張ったんだって。痛いからって下手に病院に行ったりしたら「まだまだですね。もう一度家に戻ってください。」なんて言われるんだって。

父さんは男だからよくわからないけれど、陣痛ってそうとう痛いらしいよ。

君も後、早けりゃ二十年、母さんと同じだと三十年かな。同じ痛みを感じるようになるだろうから、しっかりと心しておいたほうがいい。

母さんはそうやって頑張ったけれど、五時になって、どうしても我慢できなくなってから、病院へ行ったんだって。母さんの母さんと母さんの父さんと一緒に。

君の時には、父さんと母さんが付いて行ってあげるからね。心配いらないよ。

朝七時ちょうどに、突然電話が鳴ったんだ。

その時、父さんは起きたところで、ねむたい目をこすりながらも、めいっばい急いで電話の所まで行ったんだけど、ベルは二回なって切れちゃった。「なんだこの野郎。」と思いながらも、また鳴るだろうと身構えていると案の定。

「奥さん今日の五時頃入られたんですけれど、赤ちゃんの心拍数が下がるんです。最悪の場合もありますので、お父さんも会社を休んですぐに来ていただけないでしょうか。」と当直の医師からだった。

まず、歯を磨いた。次に、一杯の冷蔵庫のお茶を飲んだ。五分後には家を出た。

車に乗りながら、タバコを二本吸った。道は混んでいなかったが二回、赤信号をそのまま走った。

七時二十分、病院に着いた。

母さんはベットに左側を下にして横を向いていた。傍らには分娩監視装置。しきりに陣痛圧と心拍数を記録したグラフを吐き出している。

三分間隔で陣痛がおこっている。陣痛圧が高まると110あった心拍数が一瞬、60まで下がる。

「腰をさすって。楽になるから。」と母さんが言う。

院長が来て説明する。「多分、臍の尾がどこかで圧迫されていて、酸素が赤ちゃんに行きにくくなっています。分娩が長引くと赤ちゃんも弱ってきます。自然分娩が絶対に出来ないわけではないけれど危険は多くなります。」

母さんは院長先生に言った。「切ったほうが、赤ちゃんは楽なんですよね。」

父さんも同じ気持ちだったよ。とにかく、一番大切なのは君の命なんだから。

だって、十カ月も、ほんと小さな一皿くらいの命から、やっと、ここまで幸運にも育ってきたんだから、絶対に、絶対に、外の空気をすって欲しかった。

看護婦さんが「手術同意書」を持ってきた。「……………何があっても異議その他を申し立てません。」

何か、やな感じ。

でも、ここまで来たらやるしかないよね。

午前八時四十分。母さんが手術室に向かった。

迎えに来た看護婦さんが言った。

「難しい手術ではありませんから、心配しないでください。二十分くらいで終わりますから。」

それはそうかもしれないが、心配しないでいられる訳がない。何といっても全身麻酔でおなかを切るんだから。

母さんの母さんも気が気でない様子だ。

父さんはこっそり、病室から出てタバコを吸いに行ってきた。

半分も吸わないうちに、また戻って来た。

時間の進むのが本当に遅く感じられた。だって、まだ三分しかたっていないもの。

病室の向こうの看護婦詰め所の中を、看護婦さんがあわただしく走っている。

カチ。カチ。カチ。カチ。カチ。

と時計の音が聞こえるような感じ。

テレビのドラマでお産に立ち会うシーンがあったけど、まさにそんな風景。
動物園の熊さんみたいに廊下をうろうろ。

こういうのを居ても立ってもいられないというのだろう。

午前九時六分

「うん？　今、何か聞こえたか。」

「ウェーン、ヘーン、ウェーン、ウェーン、ウェーン……。」

元気な声だ。元気な声だ。

君が自分の肺で空気を吸った瞬間だ。

午前九時十分。

看護婦さんが、君をバスタオルにくるんで連れてきてくれた。

「おめでとうございます。元気な女の子ですよ。」

ああ、よかった。よかった。本当によかった。よかったね。

これからは、君と、母さんと、父さんと三人でずーっと一緒に、暮らしていくんだね。

「君の未来に、幸せがありますように。」

一九九四年十月吉日

父より

『旅に出て回想し明日を考える』

(財)中部産政研 事務局長

十 亀 義 則



〔プロフィール〕

十亀 義則 (58歳)

- 1936年 愛媛県生まれ
- 1963年 トヨタ自動車工業へ入社、元町工場に勤務
- 1967年 トヨタ労組執行委員、全国自動車中央執行委員
- 1970年 元町工場へ職場復帰
- 1973年 全トヨタ労連執行委員、トヨタ労組・全トヨタ労連の副委員長などを経て
- 1986年 9月より全トヨタ産政研事務局長
- 1988年 財団設立から現在に至る
- 〈趣味〉 庭の草花いじり
- 〈モットー〉 相手の立場に立って物事を考える
- 〈家族〉 1男1女は独立し、妻と2人暮らし

☆四国小旅行で古里を回想

一九九四年五月の連休に愛媛の実家へ、兄の三回忌法要で帰った。久しぶりに兄弟や親類などが集まり、想い出話に花が咲き楽しい一時を過ごした。

その兄の想い出は、私より六歳年上で、若い頃村の青年団活動には大変熱心で、祭りなどの行事があるといえば、なわをなうたり、飾りを作ったりするので、いつも我が家に持ち帰り手伝わされたことを覚えている。秋祭りにしし舞いなどで主役を演じたり、神輿をかついでいる姿など格好いゝ兄と自分も早く大きくなってやりたいなとも思ったりもした。多分、その時期は終戦直後だったと思うのは我が古里「桜樹村滑川」には松山や広島に出ていて立身出生した人が空襲に合い疎開して帰っている時だった。その中には広島へ造船の仕事で働きにいった原爆にあった「和（かず）さん」（当時二十歳ぐらい）が、めまいがするとか、髪の毛が抜けるといっていたが、それから一年ぐらいで他界した。その母親が遠く広島まで行かすのではなかったと悲しんでいた姿が脳裏に焼き付いている。

我が家には遠縁に当る家族が疎開してきたので一気ににぎやかになり倉庫を改造して入居したのを覚えている。そこに色白のかわいゝ君江ちゃんがあったので近くの川原で遊んだ。その大人は我が家の林業の仕事に従事していたので朝早くから夜遅くまで、下刈りやら伐採をしていた。その間、私達に言い付ける仕事は、当時はまだ電気が来てなかったのでランプのほやみがきとその日の風呂を沸かす薪を拾い集めて来るのが日課だった。その仕事は君江ちゃんがほやをみがき、私が近くの山に薪を拾いに行つて、二つの用事をいち早く済ませて、餓鬼大将として、家から五分ぐらいの中山川の上流に

当る滑川で石を投げたり魚を捕ったりして遊び、ある日私が川で大怪我して血が出た時、君江ちゃんが顔色を変えて、義やん（私）が死んだと兄に言って来たもんだから、びっくりして飛んできて、なーんだ大したことはないともぎの若葉をもんで血止めしてくれたのを覚えている。あの頃は紙風船をくれるのがうれしかった越中富山の置薬ぐらいが唯一のたよりでしたが、けっこうそこらにある草木の葉でも直ったような気がする。今、想い出すのはその兄と君江ちゃんのことです。その方も今では、おばさんになって松山の近くに住んでいるよと教えてくれたが、昔のイメージが崩れるので合わないことにした。そのかわり、桜樹村滑川で過した幼ない時代を想い出すには、今も昔もそのまゝの日本で最後の清流といわれる四万十川に一泊二日の小旅行に出掛けることにした。

実家の車トヨタ・カムリに乗って、コースは松山からNHKの「おはなはん」の舞台になった大州市の肱川^{ひじかわ}で一腹し、闘牛場や第七代藩主伊達宗紀^{だてむねたか}の退隠場所といわれる天赦園^{てんしゃえん}を見学し、宇和島市を抜けて、宇和海をながめながら車を走らせ、高知県宿毛市へ、そこで一泊した。翌朝早く起きて日本の国際線第一号の誕生となったジョン万次郎の里、中浜から足摺岬を通り、目指すべき四万十川へと急いだ。四万十川下流の中村市の遊覧船から見る兩岸の景色は人手が加えられていた。その近くの四万十トンボ自然館を訪ねた。この地は日本一トンボの多い所のようにで六十九種類も生息しているという話を聞いた。そこで小学校の夏休みの宿題で自由研究で大きなオニヤンマを採って、えさは何を与えればいゝのかを寺のもの知り博士？住職に聞きに行ったのが想い出される。まだ土佐といえども春たけなわのため二く三種類ぐらいのトンボしか見ることが出来なかった。時間を気にしながら中村市を後に江川崎の四万十川上流へとアクセルを踏んだ。川べりに沿った山道から見える雑木林の中を

四万十川の水面がきらきら光り、山あいの谷間を走る道はちょっとした油断が大事故になるような曲がりくねった状態であった。西土佐村のカヌー館に着いた時には営業時間をとくに過ぎてしまっていた。やむを得ず愛媛県南予の広見、日吉へとハンドルを切り、大州の国道五十六号線に出た時には午後十時をまわっていた。あまりにも忙しい小旅行であったが四国の西南地方にはあちこちに素朴さが残り、昔の幼い頃を回想するには十分だった。

あれからもう四十数年たった今日、物質的には豊かになり、ほしいものは何でも手に入る暖衣飽食の時代、私にとって古里の森と川の谷間の暮しが、終戦直後の貧しい物不足にもかゝわらず、どんなに豊かなものだったかを回想し、毎日一生懸命に働き、高度な技術・情報が行き交う中で、明日のゆとり、豊かさとは何か、原点を考えさせられる古里への小旅行であった。

☆夫婦ハワイ旅行で感じたこと

トヨタ自動車では長く勤めた人に対し、勤続の節節で勤続年数に応じて国内外旅行に行ける制度がある。私達夫婦もその制度を利用して、一九九四年九月上旬、あこがれのハワイ旅行に出掛けた。この制度が出来てもう二十年以上になり、その恩典にあずかった人は二万人以上になるという。この制度も時代とともに変遷し、その名も今では「ゆう・とりっぷ」になった。その名の狙いは「遠く離れたところで夫婦でゆったり過していただきたい」という願いを込めて「ゆう・とりっぷ」(ゆう＝悠 You、裕、遊)にしたという。

事の始まりは定年退職者に永年勤めてご苦労さまでしたというもので、これからも夫婦仲良く第二

の人生を楽しんで下さいよ、というような趣旨だったと聞いている。当時は労使で出発前にお元気でいっていらっしやいとあいさつし、見送りしたのを覚えている。それから何年かたちまして大きな見直しがあり、なにも定年まで待つことなく、五十歳になれば所定の勤続に應じて、本人の希望するコースで選択できるように改訂されたのを記憶している。そして、今では満四十八歳から対象になっている。その狙いは、今日の人生八十年時代、まだまだリフレッシュしてトヨタで元気に働いてもらうという意味が込められていると思われる。

実際に夫婦で四泊六日のハワイ旅行に参加して（二人で海外旅行に行くのは初めて）本当に楽しかった。トヨタ自動車の暖かみのある従業員を大切に的一面を実感した。

JTBというエージェントのすばらしい演出もあり、ホテルに着いた時には社長のメッセージ入りのカリフォルニア・ワインに家内と酔いしれた。

翌朝、ホテル前のヨットハーバーからアラモアナ・ビーチパークを散歩しながら「トヨタに永く勤めて本当によかった」と喜びをかみしめあった。いつかはあこがれのハワイへと思いながら、子育てやら仕事忙しいからを言い訳にゆっくりつれだって海外旅行することもなかったが、これで少しは肩の荷がおりたような気がする今日この頃です。わずか四日間でしたが、ホノルルを離れハワイ島のオプシヨナルツアーにも参加し、先人が移民して開拓に苦勞した土地やら四〇〇〇m級のマウナケア・マウナロア山を仰ぎ、キラウエア・カルデラ、火山国立公園や黒砂海岸など静かな所へも行き、オアフ島ではエルビス・プレスリーのブルーハワイが撮影された絶景のハナウマ湾やシーライフ・パークのアシカやイルカ・ショー、そして、最後の日の自由行動はワイキキで半日泳ぎ、後の半日はパー

ル・ハーバーを訪ねた。遊ぶことが目的の楽しい日々でした。

☆パール・ハーバー五十年と明日の日米関係

ハワイでは日本語とアロハですべて通じるので心配ないが折角の機会ですので、歴史の勉強がてら路線バスを利用してパール・ハーバーに行ってきた。アラモアナ・ショッピングセンター前のバスのりばでは本当に親切なボランティアの老人が行先ごとに乗客を誘導し整理してくれた。そして安心して乗ったバスでパール・ハーバーが見えてきたところで、下車してアリゾナ記念館まで足を運んだ。

本当に古いフィルムで当時の状況をこんなによくも撮って保存していたなあと感心する映画館での説明に胸を打たれる思いで、私達の先人が零戦で交戦し一、一七七名の犠牲者を出した様子を目前で見たような気がして重苦しくなる中で合掌した。

多分、一昨年だったと思うが、パール・ハーバー五十年の行事がおこなわれていたのをテレビで見たのを覚えている。

私どもの中部産政研でもNHK解説主幹の持田直武氏に「パール・ハーバー五十年と日米関係のゆくえ」という題で講演をしてもらったのはつい最近のことです。持田氏の話しは五十年前にパール・ハーバーを攻撃して太平洋戦争がぼつ発した。始めはあの有名な零戦で優勢だったが資源のない日本は三年九カ月しか持たなかった。今日の日本の状態は資源、人口、政治力など当時とよく似ているという。日本は世界のGNPで一五%を占め、アメリカに次ぐ第二位の経済大国になり世界各国から脅威に思われている。しかし、日本の食糧自給率は低く、昨年の冷夏、米騒動に見られるような状況で

す。資源のないのも二回のオイルショック時に経験済みです。人口にしても高齢化はものすごいスピードで進み、女性が一生に子供を生む特殊出生率は一・四六になり、晩婚化が進む中で、中長期的には若年労働力は不足し、高齢者と女性の社会進出だけでは労働力はまかないきれず外国人労働者に頼る時代になるかも知れない。政治力にしてもあてにならず、北方領土の返還、貿易経済摩擦にしても、政治のリーダーシップは常に相手国にとられている。日本が太平洋戦争で石油を閉ざされ、B 29の爆撃を受け、負けるのはわかっている。誰れも手当てが出来ない。行きつくところまで行ったのがあの敗戦であったと思われる。

経済力を持った国が世界を支配するが、一方、それらを支える資源、エネルギー、人口問題なども、いつに日本の政治力にかかっている。

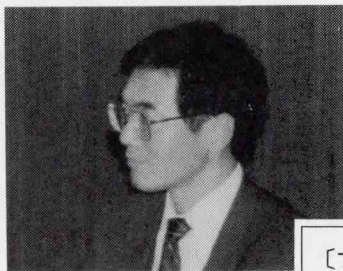
そんな講演内容を思い出しながら、ポール・ハーバーの献金箱に一ドル紙幣を二枚入れ、ワイキキ行きの路線バスに乗り込んだ。大きいことを言うようですが、私にとってポール・ハーバーの訪問が明日の日米関係を考える一助となりました。

そして、ハワイゆう・とりっぶが私達夫婦にとって本当に楽しい思い出に残る一ページとなりました。

当り前であることの大切さ

(財)中部産政研

願興寺 皓 之



〔プロフィール〕

願興寺皓之（47歳）

- 1947年 愛知県生まれ
 - 1970年 トヨタ自動車工業入社（現トヨタ自動車）業務部（現、国内企画部）
経て
 - 1976年 トヨタ自工労組執行委員（賃金対策部長、調査局長）
 - 1980年 国内企画部、調査室、経営企画部。
 - 1993年 中部産政研に出向 現在に至る
- 〈趣味〉 美術品鑑賞
〈好きな言葉〉 内省不疾夫何慍優

秋も深まる頃、中国の上海と江蘇省を訪れる機会を得た。確かに伝えられる様に、上海では次々に高層ビルや高速道路が建設され、街は大きく変貌をとげつつある。しかし、人々の暮らしはどうか、人々がひしめく裏通りのたたずまいは街の近代化から取り残された様に貧しい。外国人向けの華やかなレストランやホテルとはあまりにも対称的だ。上海の平均的な労働者の月収は六〇〇〇〜八〇〇元（数千円）程度だという。現地の目線で現実を直視する必要がある。

上海には毎年何十万人もの人々が糧を求めて流入してくる。もはや中国の農村には流出を止めるだけの仕事も余裕も無いのだという。上海市はこうした労働者を集めて「服務隊」を編成、職業訓練を施し、資材や機材を提供し、仕事を与えて「自力更生」を促しているが、提供できる仕事の量は限られている。結局、大多数の人々は待業（失業）者として路頭をさまようか、劣悪な労働条件の下での労働に甘んじるかしか選択の余地は無いのだという。改めて「職」すなわち雇用の安定と安心感の大切さを感じる。

日系進出企業の工場管理マネージャーにお聞きしたところ、生産計画の達成やそれに必要な人の配置換え等は、全て職制ルートで上から下へ指示徹底する。一切、働いている人々の意見を聞くことは無いという。もちろん労働組合も従業員会も無い。それでも労働者は油滑りの良い（？）フロアで無駄口一つ言わず黙々と単純作業を繰り返している。核になる中国人リーダーが手取り足取り新人を指導しながら、ラインスピードを維持している。ライン側の不良品の山が気になるが、製品在庫はほとんど無い。監督者に聞いたところ、「単純作業に必要な人は、良い人がいくらでも採れるから、どんなに厳しい仕事を要求しても辞めない。その分奨励給を払ってやれば文句は言わない。しかし、ある程

度技能の要る機械工などは資格を盾にとって他の工程をやりたがらないという面もあるが、いずれにせよ金で解決する話だ」という。今は確かに市場が成長し生産が急増しているからそれで良いのかも知れないが、需要が一巡して低成長を迎えた時、容易に想定しうる労働問題にどう対応していくのか。労使間の意思疎通（中国では「上通下達」）の仕組みを持たないだけに、若干の不安を感じる。企業との話し合いの仕組みを持たないこうした契約工が、山猫ストなどの突発的な争議行為に訴えるケースが最近急増していると聞く。

こうした中で、一九九五年には「労働法」が施行されるなど、労使対等の立場に立った労働協約や労使協議制による企業内労使関係の確立をめざす動きが強まっている。しかし、一方で監督者は「労働者の意見を一々聞いてとりあげていたら彼等は怠けるばかりだ。国营企業の二の舞は御免だ。」と言ひ、他方で労働者は「言われた事さえやればいい、金にならないことはしない。定時になったらすぐに帰って別の仕事に精を出すんだ。」と言う。そこには、相互信頼も長期的視点に立った協力関係も企業との一体感も見えてこない。「労使相互信頼に基づく生産性向上への協力」とか「長期安定的向上」といった日本では今や当り前の様に語られている考え方が、実は何ものにも代え難い労使の財産であることを今更ながら実感する。

產政塾活動記錄

第一回会合

- ・日時 一九九三年十二月十七日(金)
- ・会場 愛知労済豊田会館三階 第二会議室
- ・内容 塾長 梅村志郎を囲んでの討論

「最近、特に怒れること」

第二回会合

- ・日時 一九九四年一月二十八日(金)～二十九日(土)
- ・会場 神奈川県茅ヶ崎 「松下政経塾」
- ・内容

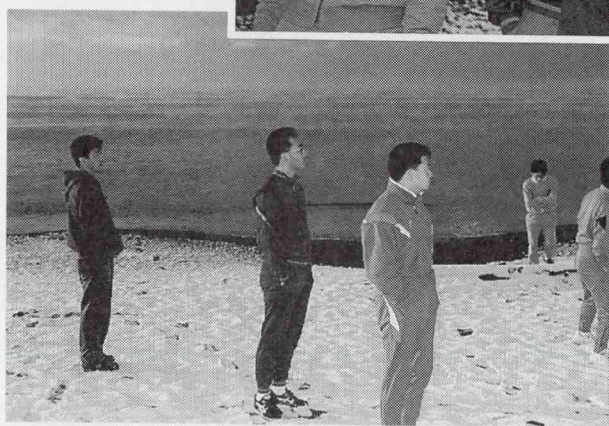
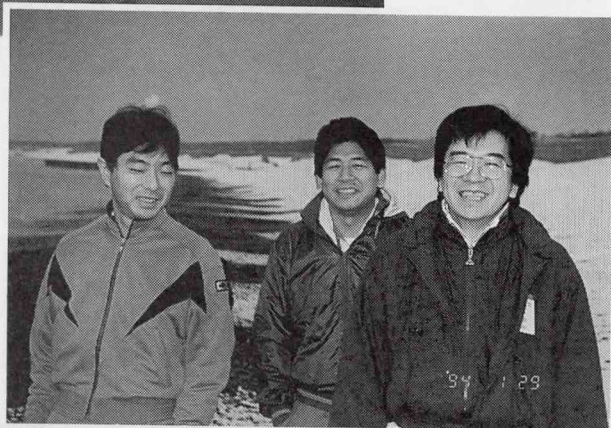
①上甲塾頭講話

②塾生との意見交換

③夕食懇談

④雪景色の湘南海岸までの早朝鍛練





第三回会合

- ・日時 一九九四年二月二十五日(金)
- ・会場 アイシン厚生年金基金会館四階 B 研修室
- ・内容 平野恒弘氏(シャプラニール東海連絡会・運営委員)をお招きして

「私がこの道に入った理由・バン格拉ティシュ NGO 活動から考えること」

第四回会合

- ・日時 一九九四年四月十五日(金)
- ・会場 愛知労済豊田会館三階 第二会議室
- ・内容 河村幹夫氏(シャールック・ホームズ研究家、三菱商事取締役)をお招きして

「二十一世紀のビジネスマン像について」

第五回会合

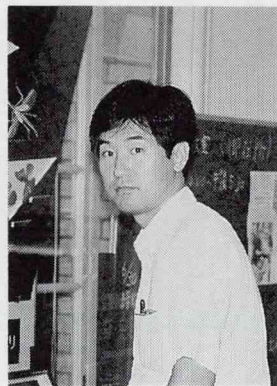
- ・日時 一九九四年六月二十四日(金)
- ・会場 岐阜公園内 名和昆虫博物館
- ・内容 名和秀雄氏(名和昆虫博物館 館長)をお訪ねして

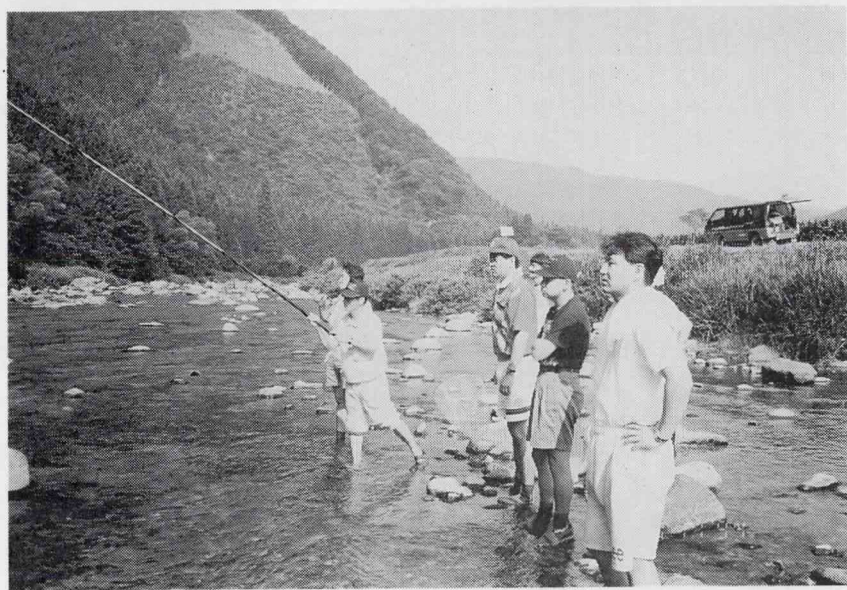
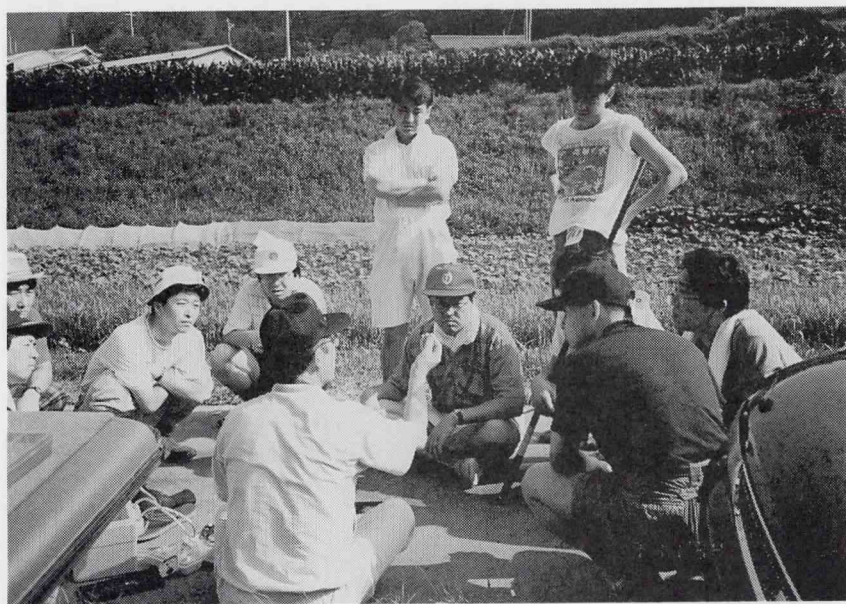
「遊び心 学び心 昆虫との半生」

第六回会合

- ・日時 一九九四年七月十日(日)～十一日(月)
- ・会場 岐阜県益田郡馬瀬村 馬瀬川にて
- ・内容 吉橋 博氏(トヨタ自動車堤工場組立部工長)をお訪ねして

「自然と人間、会社をはなれて清流と遊ぶ」





第七回会合

- ・日時 一九九四年八月三十日(火)
- ・会場 デンソー会館安城荘二階 会議室
- ・内容 塾長 梅村志郎を囲んで
「三十代にすべきこと」

番外産政塾

- ・日時 一九九四年十月二十三日(日)
- ・会場 アイシン治部坂保養所 悠遊館
- ・内容 一年の活動を振り返って



あとがき

経済企画庁の発表によれば91年5月から後退を続けていた景気も昨年の10月に底を迎え、都合三十カ月間、戦後二番目の長さを記録し非常に緩やかな回復基調に移ったということだ。

今回の不況は景気循環的な不況に加え、バブル当時の設備投資負担や1ドル＝100円を越す円高が加わり各企業、特に輸出関連の企業に重くのしかかった。この間に不況は雇用の問題にまで波及し、出向・転籍、雇用調整助成金の申請、はては希望退職の募集など事実上の日本的雇用刊行の崩壊も起こっている。さらに企業生き残りのためにはリストラ、リエンジニアリングが必要と声高に叫ばれ、今まで順調に成長してきた自動車産業にとっても厳しい状況に陥ってきている。

リストラに際して、まずターゲットにされたのが中高年管理職層だった。その理由は「働きに比して賃金が高い」というものだが、よくよく考えれば彼らこそその企業の成長を身を粉にして達成してきた企業戦士であり、社会人ではなく会社人といわれるほどその会社に忠誠を誓ってきた人たちに他ならないのではないか。

「生まれた時代が悪かった」と言ってしまうえばそれまでだが、我々その後に続く者としては、将来の自分の姿を見ているようで何となく虚しさと冷たさを覚える情景だ。

「会社・企業って何なんだろう」「会社って何のためにあるんだろう」

先日、京都で開かれた研究会のパネル・ディスカッションの席上である労組幹部が昨今のリストラの進展に対して提起した問いかけである。

同じ問いかけをアメリカで行ったら全く違った答えになったと思うが、その席上においては、それまでのリストラ礼賛の雰囲気が一気に違うものになったということが日本の、日本人の偽らざる回答なのだろうと感じた。確かに会社の存続は大切なことに違いない。しかし、その前段階にまで逆上って「何のための会社なのか」という根本の問いかけをしてみることは大切なのではないだろうか。

今回の産政塾第五期は「仕事を離れたところでの自分づくり」を意識しながら活動を進めてきた。シャプラーニールの平野さんからは「自分がどん底の生活をしている時に、一見するとその自分よりも貧しい生活をしているフィリピンの人から受けた心の贈り物に対して、その気持ちを理解できなかった自分に腹がたって……」というこの道に入った理由をお聞きした。

ホームズ研究家の河村さんからは「自分に厳しく。時間の使い方次第で、働きながらもその道の専門家になれる」と、ともすると怠惰に流れがちな私たちの耳に痛い励ましを受けた。

昆虫博士の名和さんからは「最近の親は危ないからといって子供に何もさせなすぎず。痛い目にあうことも学ぶこと。いろんなことに興味をもつことが一番大切」と教えられた。

トヨタの吉橋さんからは「夏はアユ、秋冬はへら、定年後は自分で管理池を持つことが楽しみだ。

趣味を通じての人間関係の広がりは何物にも代えがたい」と一生懸命働いたうえでの仕事以外の自分の世界の楽しさを教えていただいた。

私たち三十歳前後の年代で、会社生活も含めた生き方全般についての根本の問いかけ、生き方のゼロベースでの見直しをしてみることは、今前五十年近くを生きていくためには非常に重要なことだろう。とは言うものの少ないながらも三十年近く生きてくると今まで積み上げてきたものもかなりあるに違いない。しかし、時にはそういったものも壊す勇気も必要となる。それができるのもこの三十歳前後なのだろう。この産政塾がそれらのことを考えるきっかけとなれば幸いだ。

最後に、貴重な時間を割いて私たちの議論に参加して下さった講師の方々、忙しいにもかかわらず塾生を送りだして下さった職場の方々、そして参加して下さった塾生の皆さん、本当にありがとうございます。これをご縁として今後ともよろしくお願い致します。

一九九四年十一月

異業種の組合役員との交流により、視野を広め、組合活動に役立てて行きたい。

銀行は数多くの業種の方々と会う機会に恵まれて、
旧い時代なものはとてつとてマに深くまで
歳輪には少いものです。

今回座談会という異業種人材交流の場を知り
是非、この機会を持ちたいと思いました。

また、一層広い視野で物事を見定め、そして
見識を深め、次に後進つものと考え申しました。
宜しくお願い致します。

以上

戦後日本は、経済重視の政策を行政
から国民が理解し発展を努めてきた。
その結果日本は世界から「経済大国」
と呼ばれるようになった。しかしながら
働く者として「真の「やりがい」「豊かさ」と
いう面でみれば、私たちの部分もある
だろう。われわれ日本人は輸入したよ
うな生活がなければならぬ。民
族でもあり、国際的に見ても日本の役
割は重要なものである。

以上のことから、われわれ労働組合として
働く者の生活向上、日本の役割という
観点から申し込みたい。

日常の業務の中では、同業種の方との交流が多くあり、また、そのための
組織の枠を越えた集まりの中で、異業種の方との交流を深
めることにより、自己研鑽をは
かっている。また、歴代の塾生の方々の活動にあつたように、各
分野で一流の活躍をされて
いる方々とのふりかへし通
じて、今の自分をふりかへてみ
たい。

時代の流れや、仕事に忙
殺され、時折、自分を見失
うことがある。

そして自分自身がどこかに
行ってしまうのではないかと
感じることもある。

そんな自分を、パワーのある
異業種の皆さんの中に置く
ことで、鍛え直したいと
思っています。

(会社生活という枠でなく
"生き方"全般について考え
たい。)

入社して5年、"中堅社員"と言われ
ていて、自分にとって今後最も重要な
ことは、あらゆる知識を吸収し、現在のよ
うな激変する環境下において常に広い
視野で長期的に物事を捉えられる力を
養成することにあると思う。

屋政塾への参加を、そのような能力達成
のための大きなステップとしたい。

専門家を交えて討論を通じての
相互研鑽の機会として大いに期待して
おります。

可能であれば、「労働衛生(特にメンタルヘルス)
に関する講座の設営を希望します。

入社して10年、社内での任組みや問題点
はある程度分るが、まだ若干の点について
社内での仲間とだけ話し合うかわりなから
論じあつたこともある。

しかし、今、何か物足りないと感じてくるの
が事実である。

この度政塾で、異業種の人と話し合い、
自らの見識を深めることも、今後の会社生活
に新たなスタートが切れるチャンス何かと
つかやたい。

一言で労働・人事業務といえども
その企業の置かれている環境および
組織形態によって様々な取組み
方があろうと考える。

従来の考え方にとらわれず、異なった
視点からの発想や判断力も備える
ために、自分と同じ立場にある方々との
交流(意見交換)は有意義な場であ
ると考える。

幅広い人脈と数多くの見聞が
将来の自己に役立つと考える。

これまで経験したことのない企業業績
悪化の中で各種の変革が必要を叫
び立てている。

しかしながらどうしても決められたもの
見方からの大やが脱皮ができず
是非様々な業種の方々の話と向かい
合っていくことが必要の考えを
育つていきたい。

異業種の人との交流により、自己啓発を
図るとともに、現在自分の思っている
ことも、自己チェックすると共に、より多く
の人の考え方、発想と触れ合うことに
より、一回り成長できたとと思う。

9年2月より、人材育成を主たる業務としており、
現在、当業界においてリストラが要求されており、
業種環境変化への対応の必要性が高まっている。
これにより、私自身は入社以来12年が経過し
おろろかといふ会社(小規模)人財と存在しており
新しい柔軟な発想へは言い限りです。
今回の貴塾への参加が動機は、
上記の業務との関連が大きい。
お近く、社会人として様々な方々と交流し、
新しい物の見方、考え方と接し幅を広げる
機会を得たく申し述べた頂きたいので
宜しくお祈り致します。

以前から興味があった。

いろいろな産業に働く人々と。

知り合い、語り合う中、とにかく
交流と深めたい。

今、この産業に於いて、非常に苦しい状況にあるから、このような事が起きているから、我々のような事が行われているから、本音で聞くとこれが出来たと思う。また我々自動車業の人は、外部からはどう様に見えているか。今、自分の気持ちから、たまたま意見を参考にしたい。今後の自分の業務にないか、どこ役に立つか、見つかるかと思う。

入社6年目を迎え、今年5月に最初の配属された部署から、現在の部署にローテーションで移ったのを機会に、今までの自分を振り返ってみると、会社や周りに人とならず、流れて逝っていたように思います。

そこで、今後の自分の将来を考えた上で様々な人々と交流することによって、自分の視野を広め、環境変化の激しい現状で、自分を見失わないようにしていきたいと思ったからです。

入社して8年目を迎え、少なくとも

自分に関係する仕事の流れは、おおよそ理解しているつもりではいるが、会社内の狭い分野にとらわれることなく、他の会社の同年代の人と交流し、何かとつながりを持ちたいと思ひ、思ひました。

産 政 塾

1994年11月25日 第1刷発行

編 者 財団法人 中部産業・労働政策研究会

住 所 〒471

愛知県豊田市山之手8丁目131番地

愛知労済豊田会館

T E L 0565-27-2731

印刷所 (有) 第一プリント社

製本所 山 本 製 本

塾 政 産

塾 長 梅村 志郎

塾 生

丸 栄 労 組 齊藤 正彦

トヨタ車体 ㈱ 橋本 亨

松 坂 屋 労 組 田島 健一

名古屋鉄道 ㈱ 稲川 敦之

日本電装 ㈱ 荒谷 育三

豊田合成 ㈱ 高井 信弘

アイシン精機 ㈱ 長尾 基晴

日本電装労組 洲崎 典之

アイシン労組 渡辺 潔

全トヨタ労連 上田 信也

トヨタ車体労組 杉浦 一成

中部電力労組 内田 厚

中部電力 ㈱ 加藤 泰孝

トヨタ自動車 ㈱ 荻野 勝彦

トヨタ自動車労組 加藤 昭夫

日本特殊陶業 ㈱ 磯部 謙二

㈱ 東海銀行 二木 芳樹

㈱ 中部産政研 佐宗 正典

㈱ 中部産政研 十亀 義則

㈱ 中部産政研 願興寺 胎之